

磯 部 城

砂防施設(急傾)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2016

群 馬 県 安 中 土 木 事 務 所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

磯 部 城

砂防施設(急傾)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2016

群馬県安中土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

安中市鷲宮の磯部城は、鎌倉時代の猛将で、源頼朝の側近の一人であった佐々木右兵衛少尉盛綱が、建仁元年(1201)に築城したという伝承が遺された山城です。その後、戦国時代に武田信玄が改築したと伝わるなど、本県内における中世のものふたちの活躍を偲ばせる遺跡です。城跡には、現在も郭、堀、土塁などの遺構が良く遺されており、公園化され、人々が歴史を偲べる場になっております。

この城山公園丘陵の南急斜面に位置するアツ沢地区では、斜面が崩壊して近くの老人福祉施設や家屋に被害を及ぼす危険性があるため、早急な対策が必要となり、群馬県教育委員会文化財保護課による調整を経て、平成26年度に当事業団が砂防工事に先立って発掘調査を実施しました。

今回の発掘調査では磯部城の一部と考えられる部分が調査され、このたび、発掘調査の成果がまとめられ、発掘調査報告書が刊行される運びとなりました。

発掘調査から報告書の刊行に至るまでには、群馬県安中土木事務所、群馬県教育委員会、安中市教育委員会、地元関係者の方々などに多大なるご指導とご協力を賜りました。ここに篤く御礼を申し上げますとともに、本書が地域における歴史の解明に役立てられますことを願ひまして、序といたします。

平成28年2月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 中野三智男

例 言

- 1 本書は、砂防施設(急傾)に伴う埋蔵文化財発掘調査、磯部城にかかる埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 所在地 安中市鷺宮1946-1、1947
- 3 事業主体 群馬県安中土木事務所
- 4 調査主体 公益財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 5 調査期間 履行期間 平成26年5月1日～平成26年8月31日
調査期間 平成26年6月1日～平成26年6月30日
- 6 調査面積 129.4㎡
- 7 発掘調査体制は次の通りである。
発掘調査担当 主任調査研究員 山中 豊
遺跡掘削工事請負 株式会社歴史の杜
地上測量業務委託 アコン測量設計株式会社
- 8 整理期間 履行期間 平成27年11月1日～平成28年2月29日
整理期間 平成27年11月1日～平成27年12月31日
- 9 整理体制は次の通りである。
整理担当 専門員(総括) 高島英之
遺物写真撮影 専門調査役 藤巻幸男
遺物保存処理 資料統括・補佐(総括) 関 邦一
デジタル編集 主任調査研究員 齊田智彦
- 10 本書作成の担当者は次の通りである。
編集・執筆 専門員(総括) 高島英之
遺物観察表(土器・陶磁器) 専門調査役 藤巻幸男
- 11 発掘調査資料及び出土品は、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。
- 12 発掘調査及び報告書作成に際しては、下記の機関にご協力、ご指導をいただきました。記して感謝いたします(順不同)。
群馬県教育委員会、安中市教育委員会

凡 例

- 1 本文中に使用した座標・方位は、すべて世界測地系(日本測地系2,000平面直角座標第IX系)を使用している。
なお、座標北と真北との偏差は、調査対象地中央付近の座標による。
- 2 遺構平面図に記した数値は標高を表し、単位はmを用いた。
- 3 遺構・遺物実測図の縮尺率は原則として以下の通りとした。1：3以外の縮尺の遺物については、遺物番号の後に縮尺を記入してある。

遺構 1：40

遺物 近世・近代陶器・土器(練鉢・徳利・焜炉風口) 1：4

近世・近代陶磁器(碗・皿などの小型品) 1：3

- 4 本書で掲載した地図は、下記のものを使用した。

国土地理院 地形図 1：25,000 「松井田」(平成6年8月1日発行)

1：25,000 「富岡」(平成6年12月1日発行)

1：50,000 「富岡」(平成7年4月1日発行)

1：50,000 「深谷」(平成10年9月1日発行)

1：50,000 「高崎」(平成10年12月1日発行)

目 次

序

例言

凡例

目次

挿図・表・写真目次

第1章 調査に至る経緯、調査の方法・経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と経過	2
1 調査の方法	2
2 調査の経過	2
3 基本土層	3
第3節 整理作業の概要	3
第2章 遺跡の位置と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	5
第3章 調査の成果	11
第1節 成果の概要	11
第2節 2面で検出された遺構と遺物	11
1. 土坑	11
2. 炉	11
3. 遺構外出土遺物	13
第3節 3面で検出された遺構と遺物	15
1. 土坑	15
2. 井戸	16
3. 柵列跡	17
4. ピット	17
第4節 旧石器の確認調査	20
第4章 調査成果のまとめ	21

遺物観察表

遺物図版

遺構写真

抄録

挿図目次

第1図	遺跡の位置	1	第11図	3面1～3号ピット(柵列)平面図、4号ピット平面図・土層断面図	17
第2図	周辺遺跡図	4	第12図	3面全体図	18
第3図	周辺地形分類図	6	第13図	3面北壁・西壁土層断面図	19
第4図	1面全体図	12	第14図	旧石器確認1・2号トレンチ土層断面図	20
第5図	2面3号土坑平面図・土層断面図	13	第15図	磯部城文殊寺の砦全体図	22
第6図	2面1号炉平面図・堀方平面図・土層断面図	13	第16図	1面崩落土・2面整地面出土遺物、3面整地面下出土遺物(1)	25
第7図	2面全体図、1号トレンチ土層断面図	14	第17図	3面整地面下出土遺物(2)	26
第8図	3面1・2号土坑平面図・土層断面図	15	第18図	3面2号土坑出土遺物、3面4号土坑(井戸)出土遺物(1)	27
第9図	3面5号土坑平面図・土層断面図	16	第19図	3面4号土坑(井戸)出土遺物(2)	28
第10図	3面4号土坑(井戸)平面図・土層断面図	16			

表目次

第1表	周辺の遺跡一覧表	5	第3表	非掲載遺物集計表	24
第2表	出土遺物観察表	23			

写真目次

P L. 1		P L. 5	
1. 北壁土層断面(南)		1. 3面整地面下遺物出土状況(東)	
2. 1面西側全景(東)		2. 3面西側全景(東)	
3. 2面西側全景(東)		3. 3面1号土坑土層断面(東)	
4. 2面1号炉土層断面(東)		4. 3面1号土坑全景(東)	
5. 2面1号炉上面全景(東)		5. 3面2号土坑全景・土層断面(北)	
6. 2面1号炉上面全景(北)		6. 3面4号土坑(井戸)土層断面1(南)	
7. 2面1号炉中面全景(北)		7. 3面4号土坑(井戸)土層断面2(南)	
8. 2面1号炉全景(南)		8. 3面4号土坑(井戸)錆釉徳利(10)出土状況1(南)	
P L. 2		P L. 6	
1. 2面1号炉全景(東)		1. 3面4号土坑(井戸)錆釉徳利(10)出土状況2(南)	
2. 2面1号炉掘方全景(東)		2. 3面4号土坑(井戸)遺物取り上げ後(南)	
3. 2面3号土坑土層断面(東)		3. 3面4号土坑(井戸)底部遺物出土状況(北)	
4. 2面3号土坑全景(東)		4. 3面4号土坑(井戸)全景(南)	
5. 2面1号トレンチ全景(南東)		5. 3面5号土坑土層断面(東)	
6. 2面1号トレンチ土層断面1(東)		6. 3面5号土坑全景(北東)	
7. 2面1号トレンチ土層断面2(東)		7. 3面1号ピット土層断面(南)	
P L. 3		8. 3面1号ピット全景(南)	
1. 2面1号トレンチ土層断面3(東)		P L. 7	
2. 2面1号トレンチ土層断面4(東)		1. 3面2号ピット土層断面(南)	
3. 2面1号トレンチ土層断面5(東)		2. 3面2号ピット全景(南)	
4. 2面遺物出土状況1(東)		3. 3面3号ピット土層断面(南)	
5. 2面遺物出土状況2(東)		4. 3面3号ピット全景(南)	
6. 2面遺物出土状況3(東)		5. 3面4号ピット土層断面(南)	
7. 2面遺物出土状況4(西)		6. 3面4号ピット全景(東)	
8. 2面整地面肥前磁器染付丸碗(1)出土状況(東)		7. 西壁土層断面A-A'(東)	
P L. 4		8. 北壁土層断面1(南)	
1. 3面整地面下遺物出土状況1(東)		P L. 8	
2. 3面整地面下遺物出土状況2(東)		1. 北壁土層断面2(南)	
3. 3面整地面下遺物出土状況3(東)		2. 北壁土層断面3(南)	
4. 3面整地面下遺物出土状況4(東)		3. 北壁土層断面4(南)	
5. 3面整地面下遺物出土状況5(東)		4. 旧石器確認1号トレンチ土層断面A-A'(北)	
6. 3面整地面下遺物出土状況6(東)		5. 旧石器確認1号トレンチ土層断面B-B'(東)	
7. 3面整地面下遺物出土状況7(東)		6. 旧石器確認2号トレンチ土層断面A-A'(北)	
8. 3面整地面下遺物出土状況8(東)		7. 旧石器確認2号トレンチ土層断面B-B'1(東)	
		8. 旧石器確認2号トレンチ土層断面B-B'2(東)	

第1章 調査に至る経緯、調査の方法・経過

第1節 調査に至る経緯

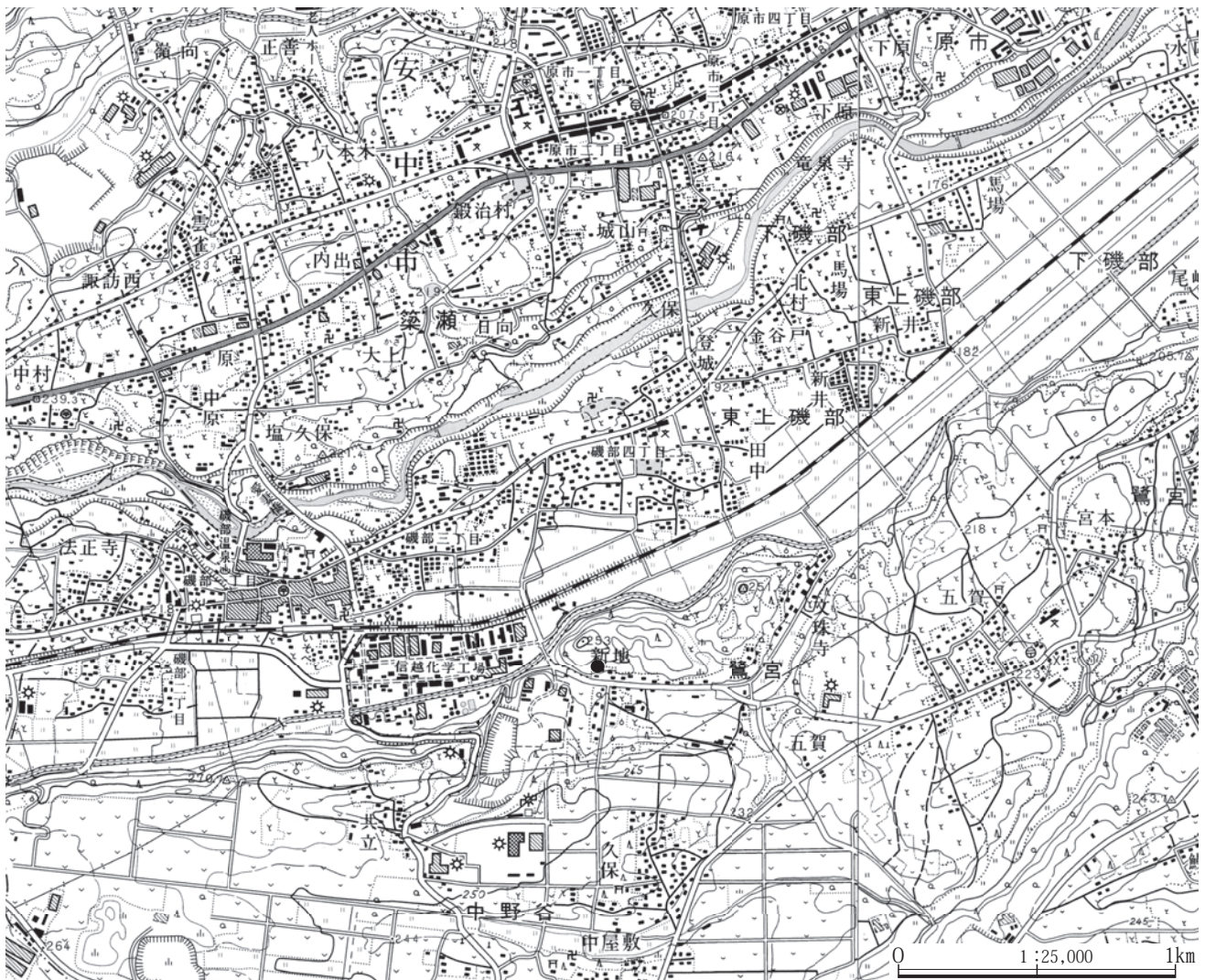
磯部城は、群馬県安中市鷲宮新地字城山に所在する(第1図)。J R信越本線磯部駅から東へ約700mに、東西に長い丘陵の西端に位置する標高253mの小山が城跡となっている。

磯部城は、鎌倉時代初めの建仁元(1201)年に御家人である佐々木盛綱が築いたという伝承があるが、城の構造の特徴からみて年代的に無理がある。戦国期、甲斐の武田方によって築城された攻撃拠点と見る説が有力であるが、歴史的な経過は全く不明である。

昭和61(1981)年に城跡のごく一部が安中市教育委員会によって発掘調査されたが、本格的な調査はまだなされていない。現在は、磯部城址公園として一般開放され、土塁や空堀の遺構が良い状態で遺されている。

磯部城が所在する丘陵の南麓で群馬県安中土木事務所によって砂防施設工事が行われることとなり、平成25年に群馬県教育委員会文化財保護課に照会がなされた。県教育委員会文化財保護課は、直ちに当該箇所が周知の埋蔵文化財包蔵地の隣接地に当たっているため、工事対象地の遺構の有無次第では埋蔵文化財発掘調査が必要なことを回答した。

その後、県安中土木事務所と県教育委員会文化財保



第1図 遺跡の位置

(国土地理院 1 : 25,000地形図「松井田」(平成6年8月1日発行)「富岡」(平成6年12月1日発行)を使用)

護課により現地協議が行われ、県教育委員会文化財保護課からは試掘調査の実施が提案された。県安中土木事務所による調整を経て、県教育委員会文化財保護課が試掘調査を実施したところ、埋蔵文化財の包蔵を確認したため、工事に先立って埋蔵文化財の記録保存を目的とした発掘調査が必要になった。

その後、さらに県安中土木事務所、県教育委員会文化財保護課、安中市教育委員会文化財保護課、当事業団等の間における調整・連絡、協議等が継続的に行われ、県教育委員会文化財保護課の調整を経て、県安中土木事務所から当事業団に発掘調査が委託されることとなり、両者間で、平成26年度砂防施設(急傾)事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査委託契約が締結され、平成26年6月1日から30日までの約1箇月間、工事対象箇所129.4㎡を当事業団が発掘調査を実施した。

第2節 調査の方法と経過

1. 調査の方法

調査の対象になったのは、磯部城が所在する台地の南麓に位置する一帯である。

遺構の測量には世界測地系(日本測地系2000平面直角座標IX系)を用いた。調査区が狭小であるため、特に本遺跡特有のグリッドは設けていない。位置の表示が必要な場合は、1m×1m単位のグリッドを作り、その南東側の差票の下三桁を用いて表している(例：X=33,401、Y=-87,285の場合、401-285と表す)。

調査であるが、まず、バックホーによる表土掘削の後に、事前に県教育委員会文化財保護課が実施した試掘トレンチを重機で再掘削して土層断面を確認したところ、地表から約1mまでは北側斜面からの崩落土に覆われていることが判明した。その下に明黄褐色土層と褐灰色土層からなる平坦面があり、この平坦面を整地面と名付けた。整地面及びその下層からは近代の遺物が数点出土した。さらに、崩落土下約30cmからはローム層となり、さらに下層には一部粘質土化している岩盤層になった。

遺構が確認できたのはいずれも整地面の下で、近世から近代にかけてのものに限られ、磯部城の築城や廃絶に関わるような遺構も層位も全く検出できなかった。表土

下の崩落土の確認面を1面、整地面の直下を2面、さらに10~20cm掘り下げた面を3面として調査を行った。

表土除去の後、鋤簾を用いて遺構確認を行い、確認できた遺構について発掘調査を行った。確認できた主な遺構は、3面に亘る調査面に、土坑4基、井戸1基、ピット1基、柵列1条、屋外炉1基が検出され、それぞれ埋土の土層観察のために半裁するなどをして掘り下げた。各遺構の名称は、各遺構の種類ごとに通し番号を付して表現した。

遺構の測量は測量業者に委託し、平面図、断面図ともに縮尺は1/20とし、データをデジタル化してその後の整理作業の便を図っている。また、写真撮影はデジタル一眼レフカメラにより、一部にブローニー版の白黒フィルムを使用している。

すべての面の調査を終えた後に、調査区において東西2m×南北3mの旧石器確認のためのトレンチを2箇所設定して、人力によって掘削を行い、確認調査を実施したが、良好なローム層は確認することができなかったため、旧石器の分布はないものと判断した。

2. 調査の経過

現地における発掘調査は、平成26年6月2日(月)、バックホーによる表土掘削から着手し、まず、事前に県教育委員会文化財保護課が試掘調査の際に掘削したトレンチを人力掘削によって再度開け、土層の堆積状況を確認するところから着手した。9日(月)までに1面の調査を終え、整地面及び2面の調査に移り、17日(火)からは3面の調査にも着手、20日(金)からは旧石器の確認調査にも着手し、24日(火)までに遺構の掘削作業を終え、その後、測量等の作業を行い、30日(月)に現場を撤収した。

調査区は降雨によって度々冠水することが多く、調査期間中は頻繁な排水作業を余儀なくされ、悩まされた。

・調査日誌抄

- 6月2日(月) 調査着手、表土下遺構検出作業。
- 6月4日(水) 1・2号土坑調査。
- 6月11日(水) 3号土坑、1号炉調査。
- 6月16日(月) 1号炉掘方調査。整地面下全景写真撮影。
- 6月17日(火) 3面調査に着手、ピット1~4、4号土坑(井戸)調査。調査区西側遺構確認作業。
- 6月18日(水) 4号土坑(井戸)、5号土坑調査。
- 6月20日(金) ローム上面での遺構確認作業、旧石器確認1号トレンチ調査着手。

6月23日(月) 旧石器確認2号トレンチ調査着手。
 6月26日(木) 重機による調査区埋戻し作業。
 6月30日(月) 発掘調査事務所棟解体、撤収。

第3節 整理作業の概要

3. 基本土層

基本土層は、旧石器確認調査時に一部を更に地表下約2.25mまで掘り下げて確認した。

現地表面から平均約1m下までは、調査区北側の急斜面からのものとみられる崩落土(4・5層)で覆われている。その下に明黄褐色土層と褐灰色土層からなる平坦な整地面(6・7層)があり、整地面及びさらにその下から近代の遺物が数点出土した。また、整地面の下0.3mはローム層であった(10層)。

遺構が確認できた面は整地面下で、時期は近世から近代である。表土下の崩落土の確認面を1面、整地面の直下を2面、さらに0.1～0.2m掘り下げ、遺構が確認できた面を3面として、上面から順次、調査を行った。

1. 暗褐色土(10YR3/3)
明黄褐色土を微量含む(表土・攪乱・崩落土)。
2. 明黄褐色土(2.5YR6/6)
径2～5mmの淡黄色軽石を少量含む(崩落土)。
3. 黒褐灰色土(10YR3/2)と黄褐色土(10YR5/6)の混じり(崩落土)。
4. 黄褐色土(10YR7/8)と明黄褐色土(10YR5/6)の混じり黒褐色土を少量含む(崩落土)。
5. 明黄褐色土(10YR7/6)
黒褐色土を多量に含む(崩落土)。
6. 明黄褐色土(10YR6/6)
黒褐色土を少量含む。鉄分の酸化による明赤褐色の変色が一部に見られる。
7. 褐灰色土(7.5YR4/1)
明黄褐色土粒を少量含む。鉄分の酸化による明赤褐色の変色が一部に見られる。
8. 灰黄褐色土(10YR4/2)
浅黄色土、明黄褐色土、褐灰色土を少量含む。
9. 明黄褐色土(10YR6/6)
浅黄色軽石を少量含む。
10. 明黄褐色土(10YR6/8)
黒褐色土を少量含む。
11. 明黄褐色土(10YR6/8)浅黄色砂質土(2.5YR7/4)と褐色粘質土(7.5YR4/4)の混じり。
12. 浅黄色砂質土(2.5Y7/4)
13. 褐色粘質土(7.5YR4/4)
14. 鈍い黄褐色土(10YR5/3)
径1～2mmの淡黄色土粒を多量、径1～2mmの褐灰色土粒を少量含む。
15. 径5～10mmの明黄褐色軽石(10YR6/6)と淡黄色軽石(2.5YR8/4)の混じり。
16. 径5～10mmの橙色軽石(7.5YR6/6)と浅黄色軽石を少量含む。一部、鉄分が沈殿して黒色になり、硬化している。
17. 浅黄色土(2.5Y7/4)
橙色の変色が少々見られる。
18. にぶい黄褐色土(10YR6/4)
一部鉄分が沈殿して黒色になり、硬化している。橙色の変色が少々見られる。

整理作業は平成27年11月1日から12月31日まで、2箇月間実施した。

遺構図面は調査面ごとに順次、点検・修正・編集を行い、11月上旬までに掲載図面をデジタルデータとして作成し、ラフ・レイアウトを作成し、デジタルによるレイアウトを指示した。

遺物については、接合・復元・写真撮影・実測の後、実測図をスキャンニングして、12月中旬までにデジタルデータ化した。遺物実測と平行して遺物の観察を行い、遺物観察表を作成した。

写真は、遺構・遺物ともデジタル写真から編集をおこなった。発掘調査現場で撮影した遺構写真は、掲載する写真を選出し、レイアウトを指示し、11月下旬までにデジタルで図版原版を作成した。一方、遺物写真は、遺物の接合復元を行った時点で、掲載する遺物を選定し、11月中旬に写真撮影を行い、レイアウトを指示して、遺構写真と同様、デジタルでの図版原版を作成した。

以上の作業と平行して本文の執筆、土層注記の修正・編集、遺物観察表等の作成を行い、それらレイアウトを作成した後にデジタル編集し、12月中旬までに報告書原稿を作成し、総括的な編集作業を12月末に完了した。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

磯部城の所在する安中市は、群馬県南部の西端域に位置している。市域は、東側は群馬県高崎市の平野部に、北側は群馬県高崎市から吾妻郡へと続く県北西山間部に、南側は群馬県富岡市北部の丘陵地帯に、西側は長野県軽井沢町の山間部に接し、関東平野の西北端に位置している。

群馬・長野両県の県境に当たる碓氷峠に源を発する碓氷川が市域の中央部を西から東へと流れているが、その両岸には河岸段丘が形成されている。近世の安中城下町、中山道安中宿の宿場町を由来とする現在の安中市中心市街地は碓氷川左岸の原市・安中台地と称される中位段丘面上に形成されている。

碓氷川の右岸には川の流れて沿って磯部面と称される下位段丘面が形成されており、J R信越本線磯部駅や磯部温泉街などは、この下位段丘面に立地している。遺跡地は碓氷川右岸の、横野台地あるいは東横野丘陵と呼ばれる第三紀層を基盤とする上位段丘面上の北端に立地する標高253mを最高点とする丘陵の南麓にあたる。この上位段丘面上には所々に湧水点があり、それら湧水点を源

とした猫沢川などの小河川が開析谷を形成し、この開析谷が谷戸田として開発されている。横野台地北側の崖線下には豊富な伏流水や小河川から流れ出た水を集めた柳瀬川が、碓氷川に並行するように西から東に向かって流れており、周辺の水田は現在でも「磯部田圃」と呼ばれる良田として知られている。このような地形の特色が、原始・古代よりこの地に豊かな耕作地を形成していたことが偲ばれる。遺跡周辺はこの横野台地の南北幅が2km近くになる最も幅広い部分に当たり、調査対象地の北側は、磯部城が築かれた東西に延びる丘陵頂上から磯部面に至る比高差約50mの急峻な崖線となっている。調査対象地の南側は、東に向かって低くなる緩やかな谷地形になっている。磯部城が築かれた丘陵は、磯部面からの比高差が約50mと大きく、西側に浅間山・妙義山、北側に榛名山、東側に赤城山を一望し、碓氷川と下位段丘面を見下ろすなど眺望に極めて優れ、軍事的な土地利用を意識した占地であると言える。

調査対象地は、この磯部城が所在する小山の南麓であり、J R信越本線磯部駅の西南西約500mの地点である。安中市鷲宮1946-1、1947番地に当たる。

柳瀬川が城跡の北側を西から東に流れ、調査対象地の東側には磯部城から文殊寺の砦が載る丘陵が続いてい



第2図 周辺遺跡図
(国土地理院 1 : 50,000地形図「富岡」(平成7年4月1日発行)を使用)

第1表 周辺の遺跡一覧表

No.	遺跡名	縄文					弥生			古墳				奈・平		その他	遺跡の概要 その他の遺構・遺物
		早	前	中	後	晩	集落		墓	集落		墓	生	集	生		
							中	後		前	中						
1	磯部城																本報告書の遺跡。
2	愛宕山遺跡													○			
3	小日向田中遺跡							○					○				
4	小日向耆町田遺跡			※				○					○				配石遺構。
5	小日向瀧遺跡							○					○				弥生時代後期住居柱穴より30×13cmの炭化材。
6	清水遺跡		○										○			※	中世土器の焼成遺構。
7	梁瀬二子塚古墳	・		○									※				碓氷川域最大規模の前方後円墳。
8	人見正寺田遺跡												※		○	※	方形周溝墓は時期不詳。As-B下水田。
9	人見坂ノ上遺跡			○						○							
10	人見西原遺跡			○							○						
11	上人見遺跡									※	○						弥生時代中期の再葬墓。
12	人見谷津遺跡									○		○					
13	人見東原・II遺跡																
14	松井田工業団地遺跡							○							◎		B・D区他。
15	松井田工業団地遺跡			●											◎		E区 古代磯部の中心部と推定される遺跡群。
16	西裏遺跡			○							○				○		
17	上北原遺跡							○				○					
18	中野谷原遺跡			●			○	○				○					
19	加賀塚遺跡		○	○	・					・	○	◎		○			
20	中島遺跡		○								○	○				※	古代牧に伴う溝。
21	砂押遺跡			○	○												縄文時代環状の集落。
22	磯部3号墳											○					直径20cmの円墳。石製模造品等出土。
23	長谷津遺跡		○	●			○	◎	○	○		○	○				
24	中野谷松原遺跡		◎	○	○												縄文時代前期中葉から後葉の大集落。
25	天神原遺跡		○	◎	○	※					○				○		環状列石。
26	中原遺跡		○				●				○					※	古代牧に伴う溝と土橋。
27	荒神平・吹上遺跡						○	○							○		
28	上ノ久保遺跡			○				○				○			○		
29	注連引原II遺跡		○				○										弥生時代前期末からの集落で周辺最古の弥生期集落。
30	諏訪ノ木遺跡							○		○	○	○					
31	下原・賽神遺跡							○							○		
A	国衙古墳群												○				
B	小日向古墳群												○				
C	郷原古墳群												○				
D	磯部古墳群												○				

縄文・弥生の項で●は竪穴住居の確認はないが、土坑等の確認や多量の遺物出土のあるものを表す。◎は大規模な遺構の確認があったことを示し、集落であれば竪穴住居ではおおよそ30軒以上の調査である。※は備考欄に説明を加えている。・はその他若干の痕跡が見られたことを表す。

る。調査対象地の北側は断崖状で、所々岩盤が剥き出しになっており、調査区自体も北から南に向けて急傾斜し、また西側から東側にかけても傾斜している。

第2節 歴史的環境

調査対象地は、インターネット上に公開されている群馬県統合型地理情報システム(GIS)マッピングぐんまの「遺跡・文化財」<http://mapping-gunma.pref.gunma.jp/pref-gunma/top/>、2015年12月現在のデータ)によれば、南北300m、東西500mほどの範囲が「1524磯部城」として

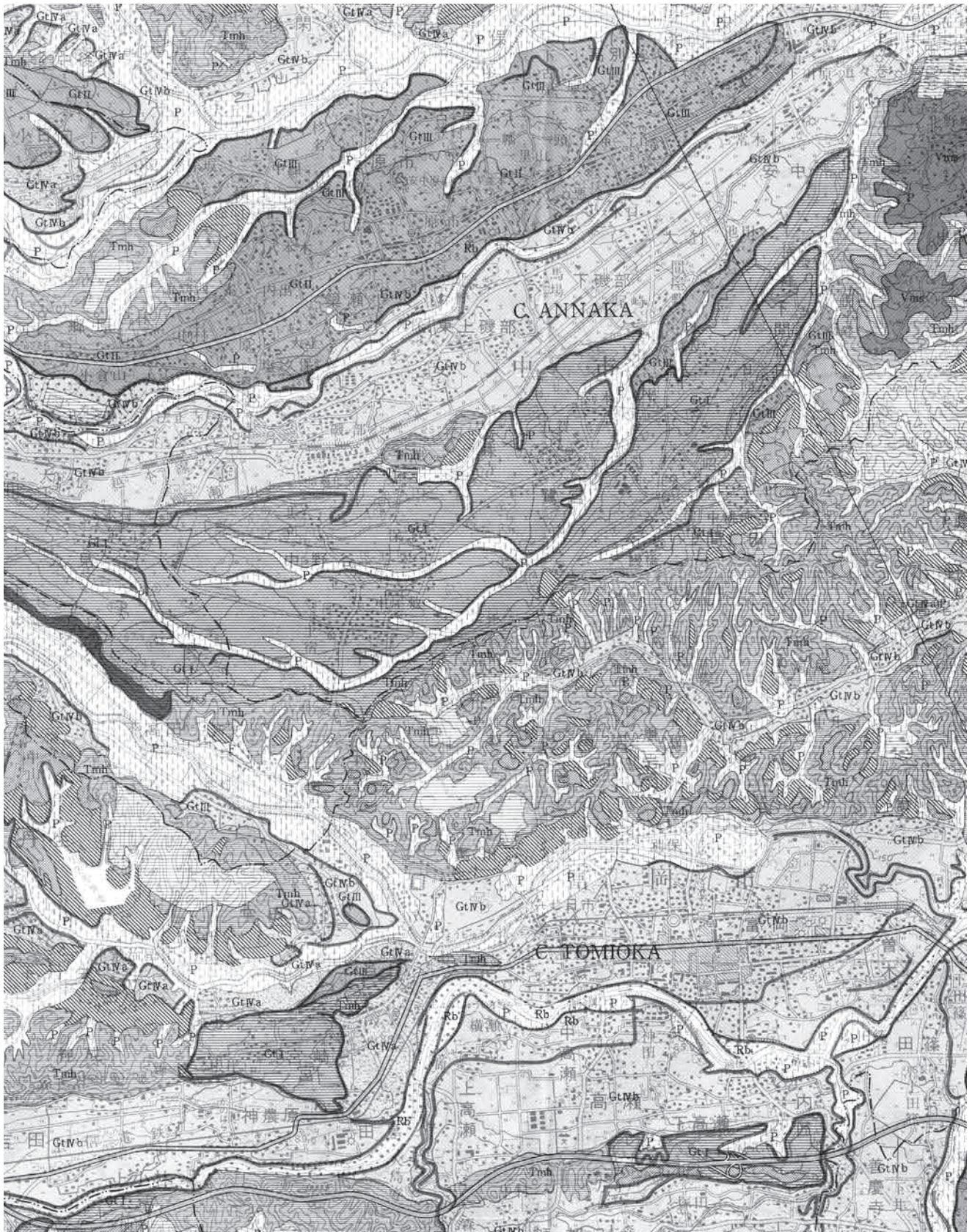
周知の埋蔵文化財包蔵地とされている。

1. 旧石器時代

本遺跡の南側に位置する横野台地上では5箇所旧石器が出土しているが、旧石器時代を対象とした発掘調査によって出土した石器は一例もない。

横野台地の北端部、本遺跡の南南西約750mの位置にある中野谷松原遺跡(24)では、台地の最高所ラインから石核が、北斜面の傾斜変換線上の黒色帯層からナイフ型石器が各1点出土している。

横野台地上を西から東に流れる砂押川が南に大きく屈



Tmh	第三紀層山地・丘陵	GtI	上位段丘	GtII	中位段丘	GtIII	下位段丘	GtIVa	最下位段丘a	GtIVb	最下位段丘b
P	谷底平野	Rb	河原							Vms	火山堆積物で形成された山頂緩斜面
	段丘崖		人工改変地								

第3図 周辺地形分類図

地形分類は群馬県『土地分類基本調査 深谷』(1991)、『同、高崎』(1993)による。
 (国土地理院5万分の1地形図「深谷」(平成10年9月1日発行)、『高崎』(平成10年12月1日発行)を使用)

曲し、猫沢川に合流する手前の東側に位置する三本木Ⅱ遺跡では、台地西端部で、ナイフ型石器が出土した。この三本木Ⅱ遺跡の西側に隣接する落合遺跡からは細石刃文化段階の石器が出土している。これらはいずれも後世の流れ込みと考えられる出土状況である。

三本木Ⅱ遺跡の南東約600m、猫沢川の右岸に位置する注連引原Ⅱ遺跡(29)からは黒曜石の槍先形尖頭器が出土しているが、平安時代の溝からの出土であり、これも後世の流れ込みである。

本遺跡のほぼ真南約1.5kmの猫沢川左岸に立地する金井谷戸遺跡からは細石刃が7点出土しているが、いずれも縄文時代早期と前期の遺物が出土する遺物包含層からの出土であった。

2. 縄文時代

本遺跡が所在する横野台地上は、縄文時代集落の大密集地帯である。

本遺跡の南南西約750mの位置にある中野谷松原遺跡からは草創期の石器が出土し、前期中葉から後葉にかけての大集落が検出され、さらに集落は中期にかけて継続している。前期中葉は伝統的な列状集落であり、土壙墓群も形成される。前期後葉になると大規模な環状集落を形成する。中央の広場様のスペース、大型竪穴建物、大型掘立柱建物群、土壙墓群など社会的機能を有する施設が整然と計画的に配置され、環状列石が構築され、計画的に形成された大集落で、広域的な黒曜石交易の拠点であり、商業的な経済的活動が営まれていた可能性も指摘される重要な遺跡である。

本遺跡の南南東約1.5kmに位置する中原遺跡(26)は前期中葉の列状集落遺跡である。

本遺跡の南西約1.5kmに位置する砂押遺跡(21)からは前期中葉から中葉にかけての大規模な環状集落が検出されている。掘立柱建物は検出されておらず、社会的機能を有する施設も存在していないのが特徴である。

中野谷松原遺跡の南西に隣接する天神原遺跡(25)では前期から後期までの大集落が検出され、環状列石が構築されている。妙義山の景観を意識した集落構成が指摘されている。中期末葉から後期前葉の集落としても代表的な遺跡であり、後期中葉になると墓域は検出されているものの、居住域は検出されなかった。

本遺跡の南西約1.6kmに位置する中島遺跡(20)は中期末葉から後期前葉にかけての集落遺跡で、台地の縁辺部に柄鏡形敷石住居が並列し、敷石住居の柄部から左右に伸びる列石も検出され、居住の場に祭祀の場が組み込まれていた状態を示すものとされている。

3. 弥生時代

横野台地は初期弥生時代遺跡の密集地帯でもあるが、前期の遺跡は、注連引原遺跡群、大上遺跡、大下原遺跡、下原遺跡、中原遺跡などいずれも猫沢川右岸の横野台地南縁付近で多く検出されており、本遺跡の周辺では、西南西約1.8kmの位置にある中野谷原遺跡で前期後半の集落が検出されているくらいである。

中期前半になると、集落は一転して碓氷川左岸の安中台地上に多く展開してくるようになる。横野台地北部では、中野谷原遺跡において中期後葉に集落が再興している。

また、本遺跡の南西約700mに位置する長谷津遺跡(23)では、弥生時代前期末から中期にかけての竪穴住居が66棟、礫床墓、甕棺墓などが検出されており、当該地域における代表的な弥生時代集落遺跡である。弥生時代後期の竪穴住居から小型倣製鏡片が出土している。また、石製紡輪が多数出土し、紡輪の製作工房も存在していた。集落の主体は後期である。

4. 古墳時代

前記長谷津遺跡からは弥生時代後期から古墳時代前期にかけて集落が継続し、古墳時代前期の方形周溝墓も検出されている。本遺跡の北東約3kmに位置する諏訪ノ木遺跡(30)でも弥生時代後期から古墳時代中期以降へと続く集落が検出されている。

古墳時代中期から集落が出現し、後期には大集落が形成される加賀塚遺跡(19)は、本遺跡の南西約1.5kmに位置している。古墳時代後期から営まれる集落遺跡には、前期中野谷原遺跡や、本遺跡の西南西約2.7kmに位置する人見谷津遺跡(12)などがある。

現在までの所、当該地域で最も古く遡る古墳は、碓氷川右岸の岩野谷丘陵から横野台地にかけて点在する5世紀前半の旧岩野村57号墳、上間仁田の経塚古墳などの大型円墳である。

本遺跡の北北西約1.5kmには碓氷川流域における最大規模の前方後円墳である築瀬二子塚古墳(7)がある。6世紀初頭の古墳で、関東地方最古級の横穴式石室墳を有し、当該機における上毛野地域最大級の古墳の一つである。

このような古墳が関東平野で初めて、この時期に、この地に出現したのには、ヤマト王権の存在する西方から関東平野への入り口に当たるこの地の地域的特質が背景にあると考えられ、ヤマト王権勢力による築造と見る考え方が現在では有力である。

本遺跡に近接する古墳としては、磯部城が築城された丘陵の東側500m地点の通称文殊寺の砦の高台上にも2基の小規模な後期古墳が存在しているが、調査等は一切されておらず、詳細は不明である。

遺跡から西へ約1.2kmに位置する田中田・久保田遺跡では古墳時代中期の円墳が検出されている。

本遺跡の南西約1.1kmに磯部3号墳(22)があり、横野台地上南側約500mには古墳時代後～終末期の群集墳である中野谷古墳群が、碓氷川を越えた北西側約700mの下位段丘面には同じく古墳時代後期の群集墳である磯部古墳群(D)が存在している。

5. 奈良・平安時代

古代、この地は上野国碓氷郡磯部郷の故地に当たっていたものと考えられる。碓氷郡一帯は古代豪族石上部君氏、磯部君氏の本拠地であったと考えられている。

石上部君氏の史料上の初見は、『続日本紀』天平勝宝元(749)年五月戊寅条で、上野国碓氷郡人外従七位上石上部君諸弟らに各当国分寺に知識物を献上した功績により外従五位下を授けるとする記事である。上野国分寺造営に資金提供をした功績によって位階を大幅に昇進させるということであるが、国分寺造営に際して中央政府から褒賞されるほどの多額の資金協力が出来るような富裕な豪族がこの地にいたということになる。

碓氷評、後の碓氷郡の官衙(評家→郡家)である可能性が有力な植松・池尻遺跡は、本遺跡からは北東4.2kmと遠いが、現在の安中市街地中心部に碓氷郡家が営まれていた可能性が高くなっている。

都と各地域とを結ぶ一級幹線道路である七道駅路の一つ、東山道駅路は碓氷川の左岸、現在の中山道に近いルートを通っていたと想定されており、碓氷川右岸の横野台

地からは約1.5km程度北に当たっている。

本遺跡から西へ約3.5kmの人見正寺田遺跡(8)、同じく3.3kmの人見中の条遺跡、同じく約3kmに位置する人見大王寺遺跡、同じく約2.5kmの大王寺地区遺跡群、同じく2～2.2kmの人見北原遺跡・西裏遺跡(16)・下新井遺跡・諏訪辺遺跡などJR信越本線の南側に沿った地域で古代の集落が検出されている。西裏遺跡からは、郡名の1文字とも通じる「碓」と焼成前に刻書された須恵器片が出土していることも特筆される。

また、本遺跡の南東約800m～1.5kmにかけて点在する中野谷地区遺跡群の注連引原Ⅱ遺跡・下塚田遺跡・中原遺跡・下宿東遺跡・細田遺跡・和久田遺跡・天神原遺跡・中野谷松原遺跡・砂押遺跡・上宿南遺跡・原遺跡・上北原遺跡(17)から横野台地南端の西向原遺跡、真光寺原遺跡、向原Ⅲ遺跡などにかけて、古代の牧の遺構が検出されている。恐らくは発掘調査された例としてはわが国屈指の規模の古代の牧であるが、史料上、多くの官牧や勅旨牧が設置されていたことが知られる上野国であるにも関わらず、この、安中市の横野台地全域にかけての広大な範囲で検出された牧は、史料上、全く見えないのである。この点をどのように考えるかが、この地域における古代社会像を解き明かす上でも最も重要な課題である。

また、天仁元(1108)年に起きた浅間山大噴火によって、碓氷峠の麓に当たる碓氷郡は大打撃を受けたであろうことは想像に難くない。復興の遅れが想像される。

水田の遺構は、横野台地北側の崖線下から検出されている。

6. 中世

鎌倉時代初期の「中院家領目録案」(久我家文書)に「上野国石井庄」が見える。戦国時代の永禄4(1561)年前後に作成されたと見られる彦部文書中の「上杉氏所領目録」に「宇須井庄」の文字が見えるので、「中院家領目録案」に見える「石井庄」も碓氷荘と見る学説が有力である。そうなる少なくとも鎌倉時代初期には、東毛地区の新田荘のように、郡名を冠する一郡規模の巨大な荘園が、すでにこの地には形成されていたことになる。碓氷郡も平安時代中期以降、一郡そのものか大部分が荘園化したのであろう。中院家は、鎌倉時代から南北朝時代にかけて上野国の知行国主であった。

『吾妻鏡』によれば、磯部郷に入部した幕府御家人として佐々木盛綱(『吾妻鑑』建仁元年4月3日・5日、5月14日条)と飽馬郷の飽馬齋藤一族の名が見える。

佐々木盛綱は鎌倉幕府の草創に貢献した有力御家人であり、磯部郷は所領の一つであったと考えられている。伝説上、磯部城の築城者に擬せられており、東磯部の松岸寺の正応6(1293)年3月22日及び同4月20日銘の砂岩製五輪塔は佐々木盛綱夫妻の供養塔と伝承されているが、関連は考えにくい。また、西磯部の金井八幡宮が佐々木盛綱の創建と伝え、下磯部の普門寺が盛綱の祈願寺という伝承を有し、下野尻の駒足洗池では盛綱の子息である高綱が乗馬の足を洗ったとするが、いずれもかなり後世に成立した伝承の部類に過ぎない。また、盛綱以後、磯部郷における佐々木氏の動向を示す史料は皆無である。

一方、飽馬齋藤氏は、武蔵国太田荘を基盤とした齋藤実盛の一族と見られ、鎌倉時代初期に飽馬郷に入部し、元久2(1205)年6月に起こった畠山重忠の乱では上野守護安達景盛に従っている。その後も安達氏の被管であったが、弘安8(1285)年に起こった霜月騒動で、安達氏本宗家と共に滅亡し、以後の動向は不明。

鎌倉幕府滅亡後、新田義貞が上野国司・守護に任じられるが、まもなく足利尊氏が持明院統の天皇を擁して幕府を樹立すると母方の外戚に当たる上杉氏の当主を関東管領・上野守護職に任じ、以後、上杉氏が代々世襲した。当時の文書には、現在の安中市周辺では、安中氏、飽間氏(飽馬齋藤氏との関係は不明)、依田氏などの在地武士たちの名が見える。

室町将軍と鎌倉公方との本格的な覇権争いに発展した享徳の乱は、享徳3(1455)年12月から文明14(1483)年11月まで30年近く続いた。関東管領・上野守護職上杉顕定は、関東での戦乱が激化する中、鎌倉から上野国守護所(板鼻)、さらには平井城へと遷るが、天文20(1551)年、上杉憲政が北条氏との合戦に敗れ、永禄元(1558)年、越後の長尾景虎を頼って越後国に逃亡、西上野は北条氏の支配下に入り、北条氏は関東八箇国を制覇した(『小田原旧記』)。

越後の長尾景虎は、永禄3(1560)年、上野国に侵攻、国内の諸城を次々と落として小田原城下まで迫ったが、本拠地越後に戻ってしまうと、甲斐守護職武田晴信は、

西上野最大の在地勢力である長野氏を屈服させ、永禄9(1566)年9月に箕輪城を、翌10(1567)年4月には、旧上野国銜蒼海城を落して利根川以西の上野国を武田領とした。

武田晴信亡き後の天正10(1582)年、織田信長は武田氏を滅ぼし、信濃・甲斐、西上野などの武田旧領は信長の支配下に入った。信長は、重臣の滝川一益を関東管領に任じて厩橋城に配置、関東の武田旧領の支配を任せると共に北条氏への備えとし、松井田城には一益の臣である津田小平次が入城したが、同年、信長が本能寺の変で横死すると、侵攻してきた北条氏との合戦に滝川一益は敗れ、関東一円は再び北条氏の領するところとなった。北条氏の西上野支配の拠点は箕輪城であったが、信濃進出のために松井田城が重要視され、北条氏家臣である大道寺政繁が入城した。松井田城は、この時期に大規模な改修を受け、大城郭に変貌している。天正18(1590)年の豊臣秀吉による小田原攻めに際して、松井田城は豊臣方の前田利家・上杉景勝連合軍によって攻められ、落城した。

安中市内には中～近世城郭・城館が44箇所確認されている。市域の地形は北部に山地、南側に碓氷川の河岸段丘、中央部は碓氷川と九十九川に夾まれた東西に細長い台地が続き、南北が両河川によって分断されるという特徴がある。また、歴史的背景として、中部山岳地帯から関東平野への出入り口である碓氷峠を間近に控え、東西に古代東山道駅路、中世鎌倉街道、近世には中山道といった幹線交通路が通る交通の要衝として果たす役割も大きかった。

このような点は中世城館の分布にも反映され、大きく三箇所の地域に集中する傾向が指摘できる。

市域の北側、秋間丘陵に所在する城郭は、山頂部や丘陵先端部のような秋間川流域の低地を見下ろせる場所や遠方まで見通しが可能な場所に立地している。

市域中央部の碓氷川と九十九川とに夾まれた台地の南北両側に築かれた城郭・城館は、西の碓氷峠側からのルートを押さえる位置にある。

碓氷川右岸の河岸段丘上に築かれた城郭・城館は、碓氷川流域の低地を望む位置にある。

これらの城郭・城館は、築城時期や築城者・在城者が具体的に明確ではないものがほとんどで、そのほとんどが15世紀後半、戦国時代における甲斐武田氏、越後上杉

氏、相模北条氏らによる西上野における覇権闘争が激しく行われた時期に集中すると考えられている。これら城郭・城館の存続時期も短かったようで、武田氏滅亡後には、急速に衰退し、ほとんどが廃城になっている。

本遺跡の近隣の城郭城館遺跡としては、碓氷川右岸の横野台地上には、本遺跡の真西約1.5kmに上ノ久保館と称される方形館が、また、真東約2kmには新寺館と称する同じく方形館が、さらに真南約1.2kmには中野谷陣屋(天正年間築城、慶長6(1601)年、総社秋元長朝在城)などが所在する。また、碓氷川の左岸、本遺跡から北東～北に約1～2kmには滝山城、八幡平陣城(永禄年間(1560頃)、武田晴信在城)、原市城(築瀬城・稲荷城)、原市内出砦(安中氏在城)などの城郭城館遺跡が所在している。中野谷陣屋以外は、磯部城とほぼ同時期の城郭・城館である。

7. 近世

豊臣秀吉による小田原北条氏攻略後の徳川家康関東入封に伴い、関東一円は家康の支配するところとなった。江戸に本拠地を構えた家康は、徳川四天王の一人である井伊直政を関東防衛のための西北守護の要として上野国群馬郡の箕輪城に配置した。その後、慶長3(1589)年、井伊直政は、家康の命によって、箕輪から和田に移り、和田の地を「高崎」と改めて高崎城を築城、群馬・碓氷両郡のほぼ全域を所領とした。慶長5(1600)年12月、初代高崎藩主井伊直政は、関ヶ原の戦いにおける戦功によって加増され、かつての石田三成の居城であった近江国坂田郡の佐和山城を与えられ、近江に拠点を遷したが、上野国内の領地も引き続き統治した。

慶長7(1602)年、井伊直政が没すると、嫡子直継が跡を継いで、慶長11(1606)年、新たに彦根城を築城し、遷ったが、主君徳川家康は、直継は病弱かつ将器に欠けるとして、弟の直孝に彦根藩井伊家の家督を継承させると共に、兄・直継には別家を建てさせ、上野領3万石を分知し、碓氷郡安中に封じた。直継は名を直勝と改め、元和元(1615)年、安中城を築城、入封した。安中藩には、関東への出入り口である碓氷・牧の両関警固という重大な使命が課せられていたのである。以後、安中藩にとって碓氷関所の警護は一貫して最重要の任務とされた。

跡を継いだ直勝の子の直好は、正保2(1645)年、三河西尾に転封され、代わって水野元綱が入部、水野氏が2代に亘って藩主の座にあった。その後、寛文7(1667)年

から堀田氏1代、天和元(1681)年から板倉氏2代、元禄15(1702)年から内藤氏3代、寛延2(1749)年から板倉氏6代が藩主の座にあり、廃藩置県に至っている。少禄ではあるが歴代藩主とも有力譜代大名家の出身者であり、幕閣が、碓氷関警護の任に当たる安中藩を重要視していたことが伺える。

なお、本遺跡の北東約1.5kmに位置する磯部温泉は、『吾妻鑑』に「磯部村此所に 塩の湧き出る所あり」との記述が見え、鎌倉時代から知られていたことがわかる。近世には中山道を往来する旅人や、近在からの湯治客で賑わった。

参考文献

- ・群馬県統合型地理情報システム(GIS)マッピングぐんま-「遺跡・文化財」
<http://mapping-gunma.pref.gunma.jp/pref-gunma/top/>、2015年12月現在のデータ)
- ・(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団編『長谷津遺跡―(一)宇田磯部停車場線安中工区社会資本整備事業(市街地整備)事業に伴う埋蔵文化財調査報告書』群馬県安中土木事務所、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2012.3
- ・安中市史編纂委員会編『安中市史』2 通史編安中市 2003.3
- ・安中市史編纂委員会編『安中市史』4 原始古代中世安中市 2001.3
- ・群馬県教育委員会編『群馬県の中世城館跡』群馬県教育委員会 1988.3

第3章 調査の成果

第1節 成果の概要

今回、調査の対象となった地域は、遺構の残存状態は、必ずしも良好ではなかった。

調査は、まず、重機を用いて表土及び県教育委員会文化財保護課が実施した試掘トレンチの掘削を行った後、人力掘削で試掘トレンチを拡張した。その結果、現地表面から平均約1m下までは、調査区北側の急斜面からのものとみられる崩落土で覆われていた。その下に明黄褐色土層と褐灰色土層からなる平坦な整地面があり、整地面及びさらにその下から近代の遺物が数点出土した。また、整地面の下30cmはローム層であった。

遺構が確認できた面は整地面下で、時期は近世から近代である。表土下の崩落土の確認面を1面、整地面の直下を2面、さらに10～20cm掘り下げた面を3面として、上面から順次、調査を行い、これらの面の調査終了後に旧石器の確認調査を実施した。

現地表面から重機を用いて整地面上面まで掘削し、その後、遺構検出作業及び人為的な掘り込み箇所の掘り下げを発掘作業員が人力で行った。また、各遺構埋土の観察や土層精査、写真撮影等は調査担当者が行い、各遺構や調査区の土層断面図や遺構平面図の図下は測量業者に委託した。

なお、1面では、表土の掘削後、県教育委員会文化財保護課による試掘結果を踏まえて中世の遺構の検出を想定して調査を行ったが、遺構を検出することは出来なかった。県教育委員会文化財保護課が開けた試掘トレンチを広げて土層断面を確認したところ、地表下平均約1mのところまでは、北斜面からの崩落土であることがわかった。また、調査区の東側は、全体的にビニールやプラスチック等が含まれる現代の攪乱で破壊されていたため、以下に報告するのは2面と3面における調査成果である。

2・3面併せて検出された遺構は、土坑5基(うち、4号土坑は井戸)、炉(屋外炉)1基、柵列1条、ピット1基である。

第2節 2面で検出された遺構と遺物

整地面直下に当たる。調査区の西側では崩落土の下に整地面が広がっていた。東側は全体的にビニールやプラスチック等が埋まった現代の掘り込みがあり、整地面は遺っていないかった。

検出された遺構は、土坑1基と炉(屋外炉)1基である。遺構外では整地面の中や直下から、近代の陶磁器類、鉄製品等が多数出土した。

1. 土坑

2面で検出された土坑は1基であった。

(1) 3号土坑(第5図、P.L. 2)

位置：調査範囲の北東寄り、1号炉の北東約1mに位置する。X=33,407～33,408、Y=87,286～87,287。

主軸方向：N-87°-E。

規模と形状：東西に長い楕円形状を呈する。長さ1.45m・幅0.63m・深さ0.27m。全体に浅い。

埋土：褐色土。

遺物：なし。

時期：近代。

2. 炉

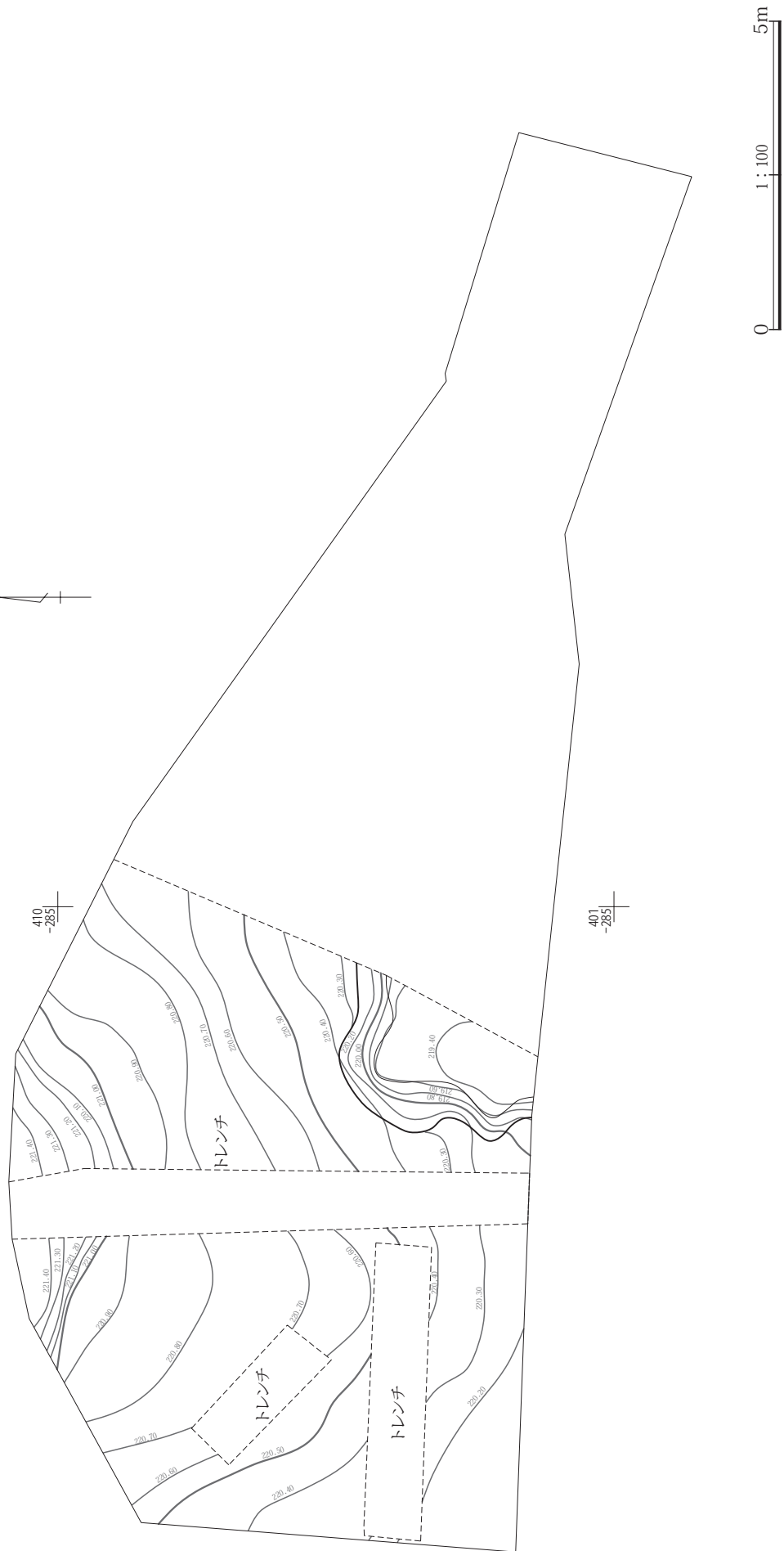
2面では屋外炉が1基検出された。鍛冶が行われたような明確な痕跡は見い出せず、用途は不明である。出土遺物から近代の所産と考えられる。

(1) 1号炉(第6図、P.L. 1・2)

位置：調査範囲の中央からやや北東寄り、3号土坑の南西約1mに位置する。X=33,406～33,407、Y=87,288～87,289。

主軸方向：N-41°-E。

規模と形状：東西に長い不整楕円形状を呈する。長さ0.93m・幅0.77m・深さ0.21m。周囲を川原石大の礫で囲った石囲炉。用途は不明。



第4図 1面全体図

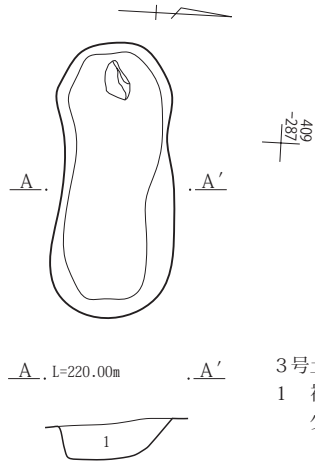
埋土：上層暗褐色土・明黄褐色土、下層にぶい黄色土、
掘方灰黄褐色土。

遺物：近代陶磁器片2点。

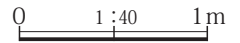
時期：近代。

3. 遺構外出土遺物

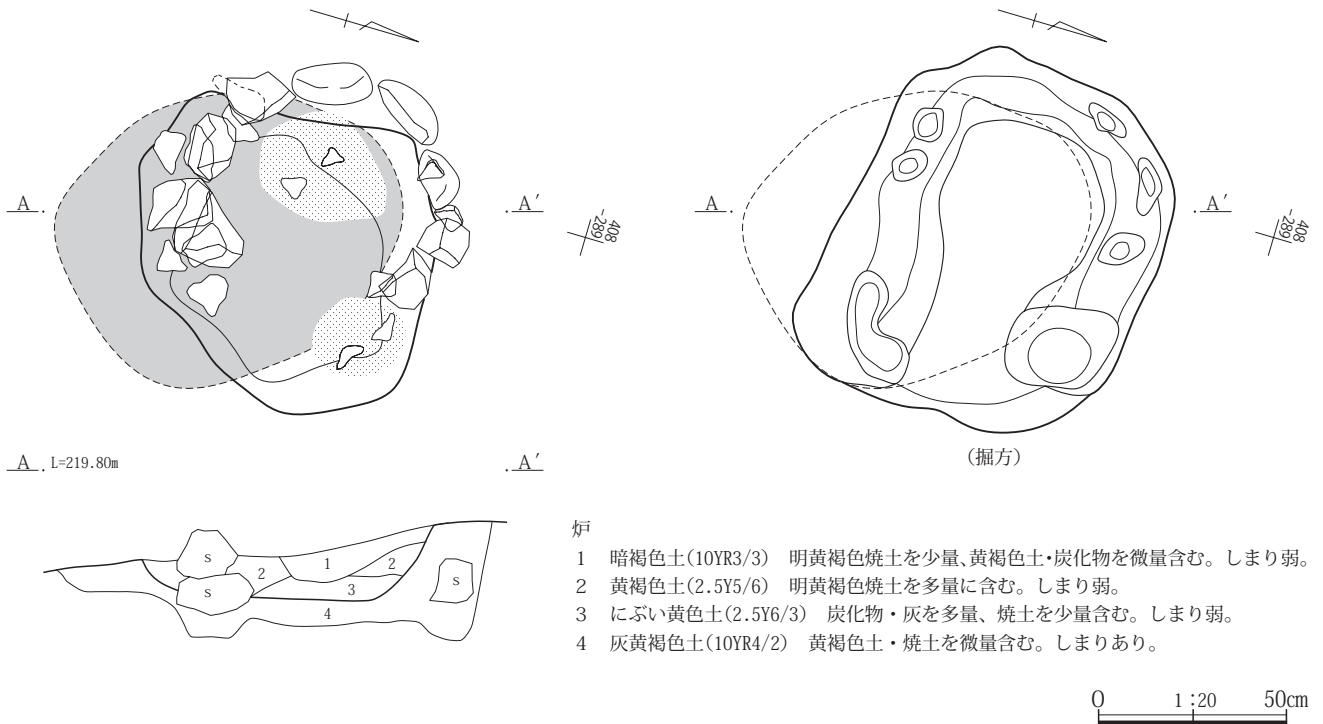
2面の遺構外出土遺物を巻末の遺物観察表及び第16
図、P.L.3に掲載した。



3号土坑
1 褐色土(10YR4/4) 明黄褐色土ブロックを
少量含む。

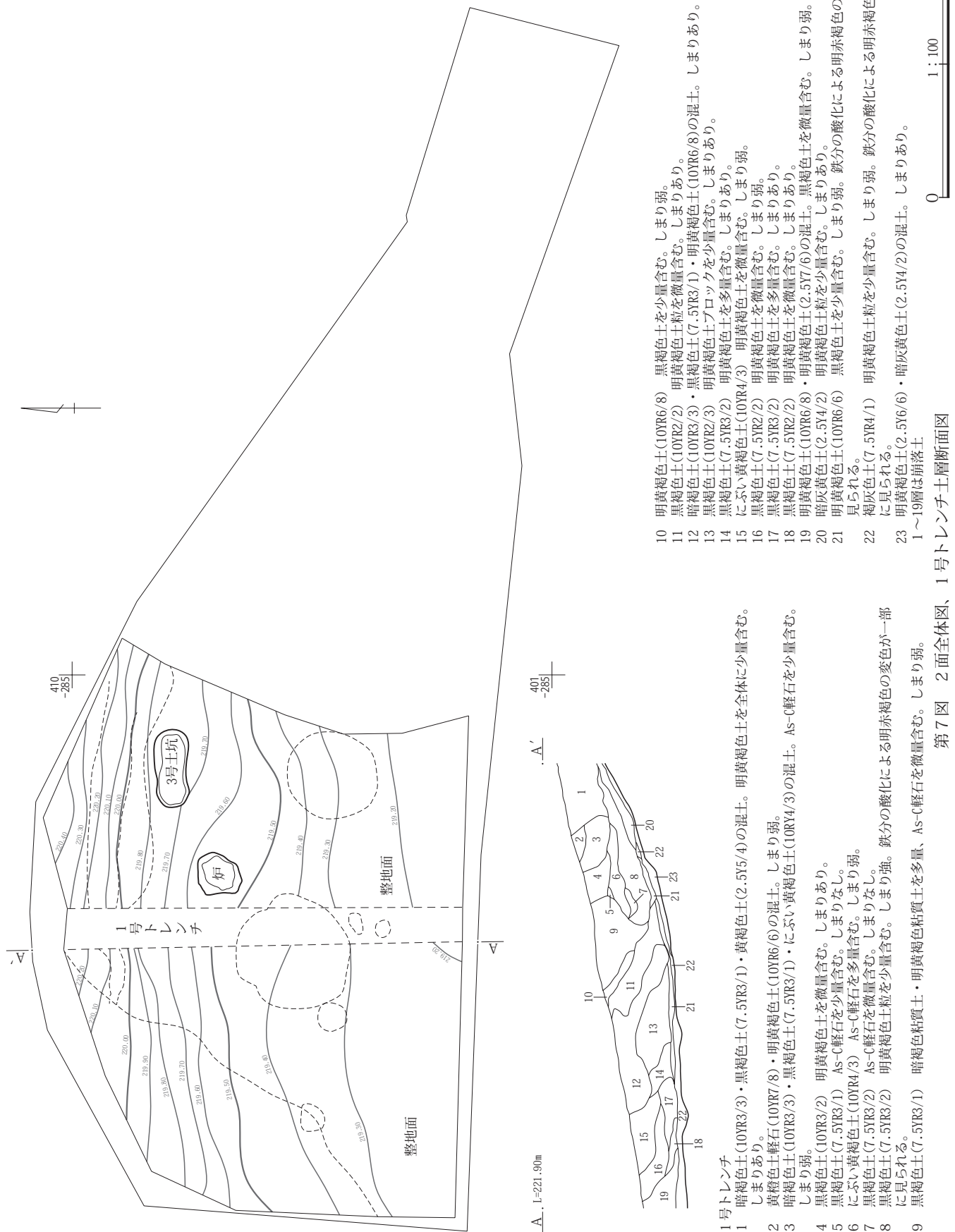


第5図 2面3号土坑平面図・土層断面図



炉
1 暗褐色土(10YR3/3) 明黄褐色焼土を少量、黄褐色土・炭化物を微量含む。しまり弱。
2 黄褐色土(2.5Y5/6) 明黄褐色焼土を多量に含む。しまり弱。
3 にぶい黄色土(2.5Y6/3) 炭化物・灰を多量、焼土を少量含む。しまり弱。
4 灰黄褐色土(10YR4/2) 黄褐色土・焼土を微量含む。しまりあり。

第6図 2面1号炉平面図・掘方平面図・土層断面図



第7図 2面全体図、1号トレンチ土層断面図

第3節 3面で検出された遺構と遺物

整地面から約20cm程掘り下げたところで井戸1基(4号土坑)、土坑3基、柵列1条(1~3号ピット)、ピット1基を検出した。土坑・井戸からは近世・近代のものと見られる陶磁器が出土している。

1. 土坑

4基の土坑が検出された。うち1基、4号土坑は紛れもなく井戸であるので、井戸として報告するが、発掘現場で取り上げられた出土遺物や写真・図面等記録類の混乱を来さないために4号土坑という遺構名は引き続き維持する。

1・2号土坑は調査区東端部で検出され、5号土坑は調査区の西寄りから検出された。

(1) 1号土坑(第8図、P.L.5)

位置: 調査区最東端付近、2号土坑の北東側約0.5mに位置する。X=33,401~33,403、Y=-87,274~-87,275。

主軸方向: N-79°-W。

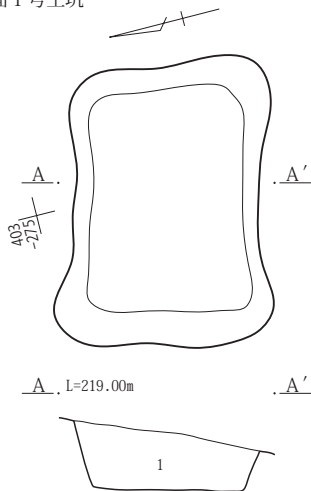
規模と形状: 西北西-東南東方向に長い隅丸長形状を呈する浅い土坑。長径1.48m・短径1.14m・深さ0.4m。

埋土: 灰黄褐色土。

遺物: なし。

時期: 近代。

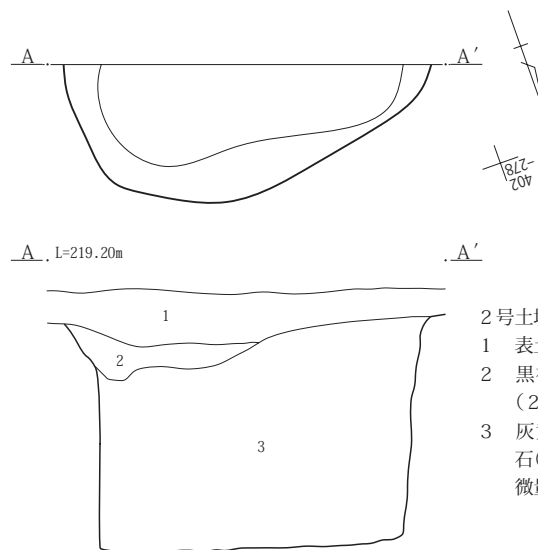
3面1号土坑



1号土坑

1 灰黄褐色土(10YR4/2) 灰白色軽石(2~7mm)を多量、灰白色粘質土・赤褐色土を微量含む。

3面2号土坑



2号土坑

1 表土・攪乱。
2 黒褐色土(10YR3/2) 灰白色軽石(2~7mm)・明褐色土を少量含む。
3 灰黄褐色土(10YR4/2) 灰白色軽石(2~7mm)を多量、明褐色土を微量含む。

0 1:40 1m

第8図 3面1・2号土坑平面図・土層断面図

(2) 2号土坑(第8・18図、P.L.5)

位置: 調査区最東端付近、1号土坑の南西側約0.5mに位置する。南壁に掛かる。X=33,400~33,401、Y=-87,275~-87,277。

主軸方向: N-70°-W。

規模と形状: 南側が調査区外に出るため全容は不明である。残存長径1.93m・残存短径0.72m・深さ1.35m。

埋土: 灰黄褐色土。

遺物: 瀬戸・美濃磁器小杯1点(近代)、瀬戸・美濃陶器灯明皿受各1点(17世紀中葉~18世紀前半)。

時期: 近代。

(3) 5号土坑(第9図、P.L.6)

位置: 調査区の西寄り、4号土坑(井戸)の西側約1.5mに位置し、南西隅が柵列中央柱穴である2号ピットに接している。X=33,404~33,406、Y=-87,289~-87,291。

主軸方向: N-77°-E。

重複関係: 南端部が柵列と交差する。

規模と形状: 径約2.15~2.2mのやや大振りで浅い不整楕円形状の土坑の北側に、径約1.3~1.5mの小振りでさらに浅い不整楕円形状の土坑が重複するような形状を呈する。長径2.18m・短径2.16m・深さ0.49m。

埋土: 上層灰黄褐色土、中層黄褐色土、下層灰黄褐色土。

遺物: なし。

時期: 近代。

2. 井戸

1基の井戸が検出されている。素堀の井戸であり、また、径も比較的小さかったので、安全を最優先し、底面までの完掘は断念せざるを得なかった。すべての遺構の調査が終了した後、重機によって断ち割りを実施した。

(1) 4号土坑(井戸)(第10・18・19図、P.L.5・6)

位置:調査区の中央から西寄り、5号土坑の東側約1.5mに位置する。X=33,404~33,405、Y=-87,286~-87,287。

主軸方向:N-27°-E。

規模と形状:開口部は南北にやや長い、径約1.8~1.5mの楕円形状の掘方を有し、深さ1.24m以下の井戸本体部

の径は約1mで、横断面の形状は円形を呈する。調査は深さ1.39mまでの部分で実施し、重機によって断ち割ったところ、井戸の掘り込みは、約3m下の硬い岩盤層まで達していた。

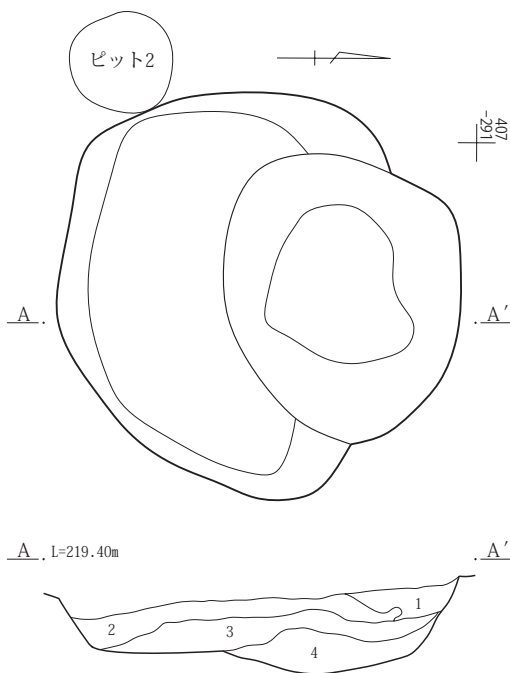
断面は漏斗状を呈する。

壁面には粘土を貼った形跡が見られ、壁面と埋没土との間が空洞になっているところもあった。長径1.75m・短径1.5m・調査深度約1.39m。

埋土:上層灰黄褐色土・褐灰色土、中層灰黄褐色土。

遺物:瀬戸・美濃陶器錆釉徳利ほか10点。

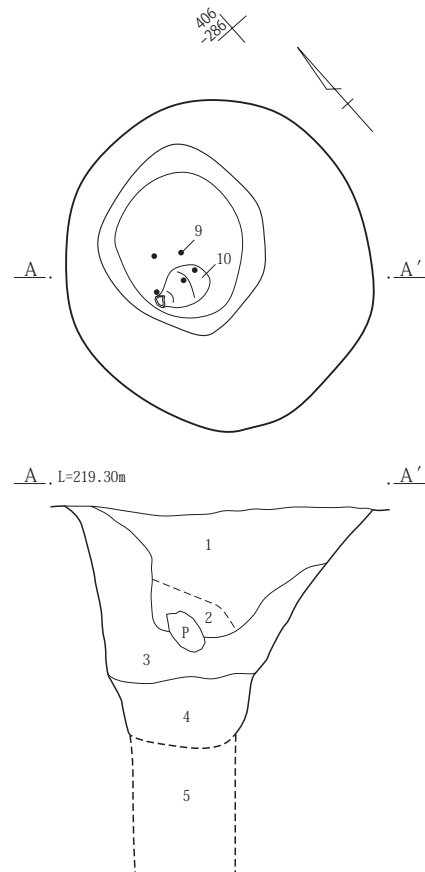
時期:近世~近代。



5号土坑

- 1 灰黄褐色土(10YR5/2) 明黄褐色土を多量、浅黄色土を少量、暗褐色土を微量含む。
- 2 灰黄褐色土(10YR4/2) 明黄褐色土・黒褐色土を少量含む。
- 3 黄褐色土(2.5Y5/3) 明褐色土を微量含む。
- 4 灰黄褐色土(10YR4/2) 明黄褐色土・黄褐色土・黒褐色土を少量含む。

第9図 3面5号土坑平面図・土層断面図



4号土坑

- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 明黄褐色土を多量、橙色土を微量含む。
- 2 空洞
- 3 灰黄褐色土(10YR4/2) 明黄褐色土を多量、褐灰色粘質土を微量含む。最下部に明赤褐色の変色がある。
- 4 褐灰色土(7.5YR5/1) 明赤褐色の変色が点在する。
- 5 灰黄褐色土：バックホーでの断割り時の観察による。

0 1:40 1m

第10図 3面4号土坑(井戸)平面図・土層断面図

3. 柵列跡

調査区の南西で検出された西北西-東南東方向に3基並ぶ1~3号ピットを平面図上で見ると柵列を形成しているように見え、土層断面やピットの掘方断面を検討したところ、これらを一連のものとして柵列を形成する柱穴とみてもおかしくはないと判断できたので、1~3号ピットを何らかの区画あるいは目隠堀的な施設と解釈した。

(1) 柵列(第11図、P.L. 6・7)

位置：調査区の南西西寄りに位置する。X=33,404~33,405、Y=-87,289~-87,293。

主軸方向：N-77°-W。

重複関係：5号土坑の南端を交差する。

規模と形状：調査区の南西西寄りの位置を西北西-東南東方向に一直線に並ぶ。3本の柱で構成され、全長はピット心々間で約2.9m。

西端柱穴1号ピットは長径0.56m・短径0.49m・深さ0.2m、楕円形状を呈する。

中央柱穴2号ピットは長径0.56m・短径0.54m・深さ0.21m。円形を呈する。

東端柱穴3号ピットは長径0.43m・短径0.26m・深さ0.56m、楕円形状を呈する。

各柱穴間の間隔は、1・2号ピット間で1.41m、2・3号間で1.45mである。

埋土：1号ピット：暗褐色土、2・3号ピット：灰黄褐色土。

遺物：なし。

時期：不明。

4. ピット

柵列東端柱穴である3号ピットの南側に近接して4号ピットが検出された。規模は3号ピットに近似する。方向から見て柵列との関係はないように思われる。3号ピットの掘り直しとも考えにくい。用途不明の小穴である。

(1) 4号ピット(第11図、P.L. 7)

位置：調査区の南西東寄りに位置する。柵列東端柱穴である3号ピットの南側約0.2mの位置に近接する。

X=33,404、Y=-87,289。

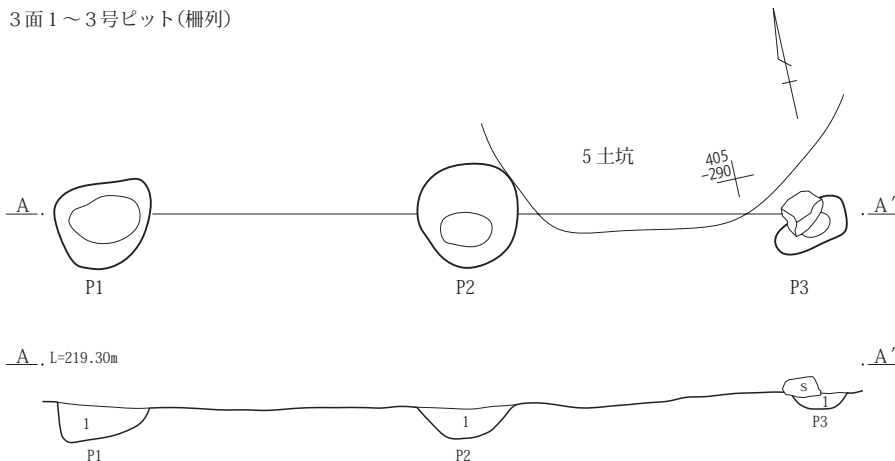
主軸方向：N-32°-W。

規模と形状：東西に長い楕円形状を呈する。長径0.31m・短径0.3m・深さ0.57m。

遺物：なし。

時期：不明。

3面1~3号ピット(柵列)



1~3号ピット

1号ピット

1 暗褐色土(10YR3/3) 明黄褐色土を少量含む。

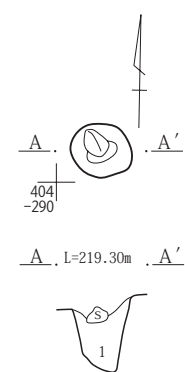
2号ピット

1 灰黄褐色土(10YR4/2) 明黄褐色土を少量含む。鉄片あり、周囲に赤褐色の変色が見られる。

3号ピット

1 灰黄褐色土(10YR4/2) 明黄褐色土を少量含む。

3面4号ピット

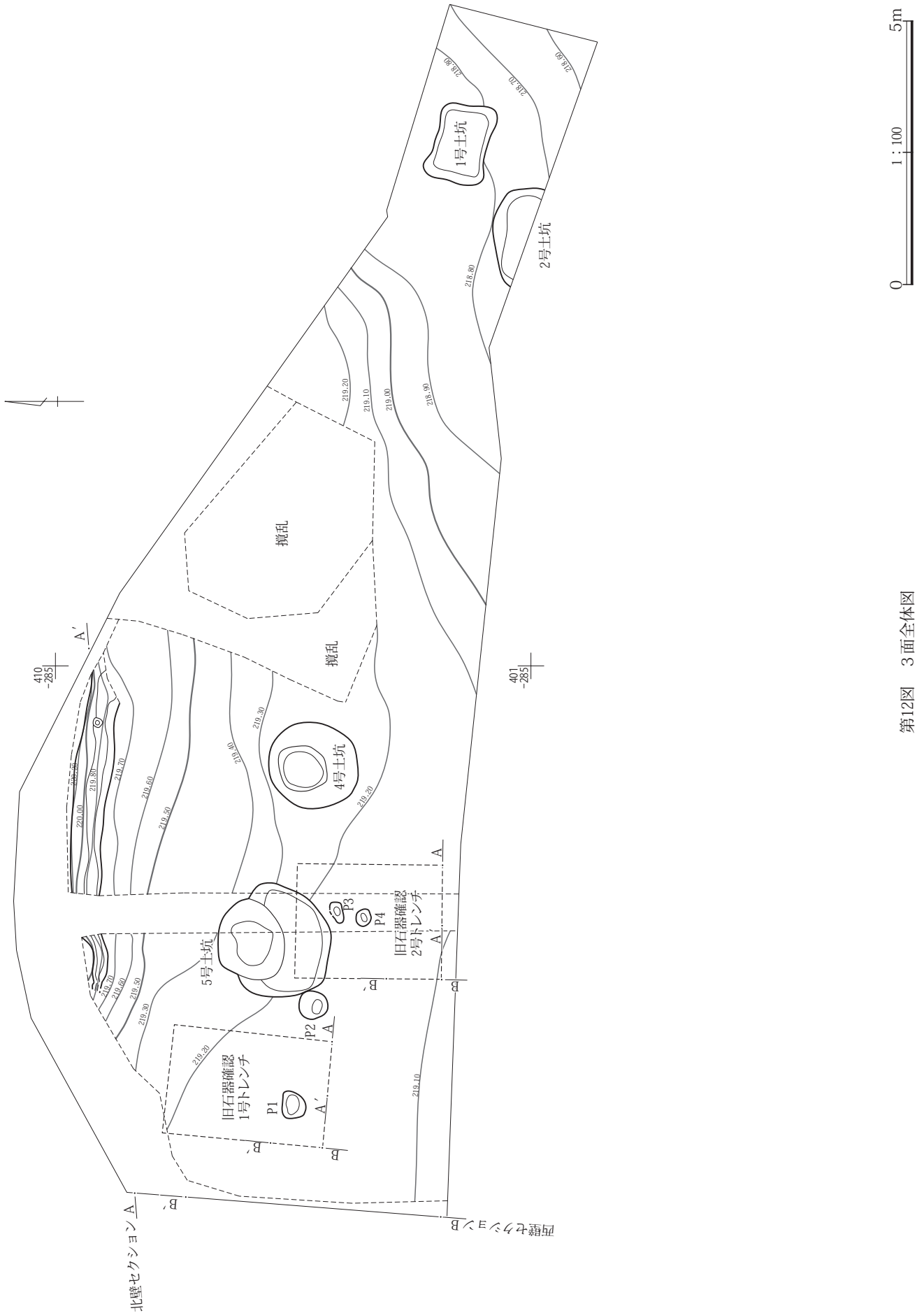


4号ピット

1 灰黄褐色土(10YR4/2) 明黄褐色土を多量含む。

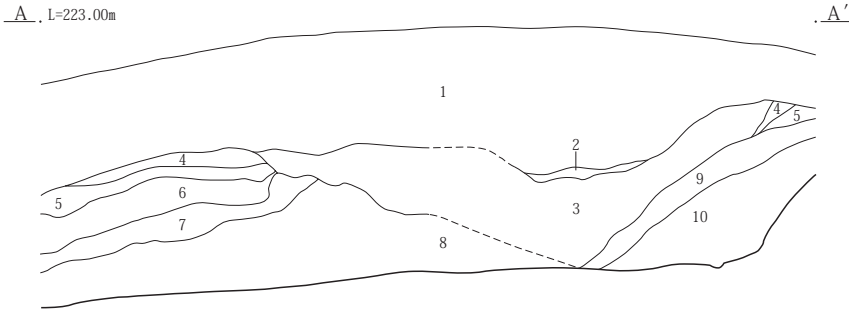
0 1:40 1m

第11図 3面1~3号ピット(柵列)平面図、4号ピット平面図・土層断面図

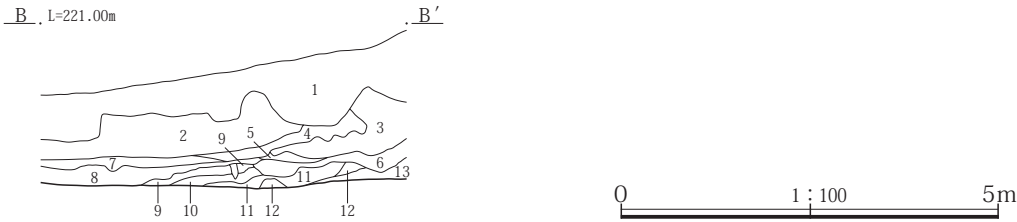


第12図 3面全体図

3面北壁セクション



3面西壁セクション



北壁A—A'

- 1 崩落土
- 2 褐灰色土(7.5YR4/1) 橙色土を少量、黒褐色土・明黄褐色土を微量含む。
- 3 黄褐色土(10YR5/8)と明黄褐色砂質土(2.5Y6/6)の混じり。黒褐色土を少量含む。
- 4 浅黄色砂質土(2.5Y7/4)
- 5 褐色粘質土(7.5YR4/4)
- 6 にぶい黄褐色土(10YR5/3) 直径1～2mmの淡黄色土粒を多量、直径1～2mmの褐灰色土粒を少量含む。
- 7 直径5～10mmの明黄褐色軽石(10YR6/6)と淡黄色軽石(2.5Y8/4)の混じり。
- 8 直径5～10mmの橙色軽石(7.5YR6/6)・浅黄橙色軽石を少量含む。
- 9 赤褐色(2.5YR4/6)・明赤褐色(5YR5/8)・にぶい黄橙色(10YR6/)の層からなる一部粘土化した岩盤。最上部は鉄分が沈着し暗赤灰色(10R3/1)に変色し、硬化している。
- 10 にぶい黄褐色粘質土(10YR6/3)

西壁B—B'

- 1 暗褐色土(10YR3/3) 明黄褐色土を少量含む。崩落土。
 - 2 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 明黄褐色土を多量、黒褐色土を少量含む。崩落土。
 - 3 黄褐色土(10YR5/6) 底部に浅黄色土を多量に含む。崩落土。
 - 4 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 明黄褐色土を少量含む。崩落土。
 - 5 褐色粘質土(7.5YR4/4)とにぶい黄褐色土(10YR5/4)の混じり。
 - 6 にぶい黄褐色土(10YR5/4)・灰黄褐色土(10YR4/2)・浅黄色砂質土(2.5Y7/4)の混じり。淡黄色土粒を少量含む。根攪乱。
 - 7 灰黄褐色土(10YR4/2) 浅黄色土・明黄褐色土・褐灰色土を少量含む。
 - 8 黄褐色土(10YR5/8)と明黄褐色砂質土(2.5Y6/6)の混じり。黒褐色土を少量含む。
 - 9 浅黄色砂質土(2.5Y7/4)
 - 10 褐色粘質土(7.5YR4/4)
 - 11 にぶい黄褐色土(10YR5/3) 直径1～2mmの淡黄色土粒を多量、直径1～2mmの褐灰色土粒を少量含む。
 - 12 直径5～10mmの明黄褐色軽石(10YR6/6)と淡黄色軽石(2.5Y8/4)の混じり。
 - 13 直径5～10mmの橙色軽石(7.5YR6/6)・浅黄橙色軽石を少量含む。
- 8～12層は整地面

第13図 3面北壁・西壁土層断面図

第4節 旧石器の確認調査(第12・14図、P.L. 8)

調査区の西寄り2箇所旧石器の確認調査坑を設定し、確認調査を実施した。基本土層におけるロームの検出状況等や調査範囲の大小を勘案して調査坑を設定した。

整地面(6・7層)の下約0.3mからはローム層(10層)になり、さらに下層には一部粘質土化している岩盤層が見られた。

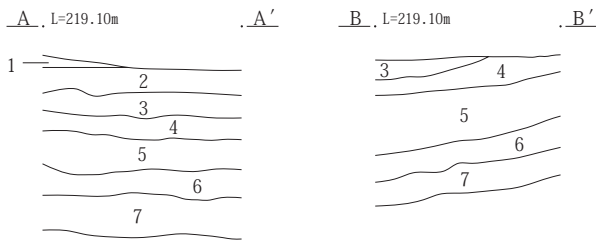
調査区中央西端で設定した1号トレンチは東西2m・

南北3m、地表下約0.9mの岩盤層まで掘削した。

調査区の西寄り、南端近くに設定した2号トレンチは東西2.2m・南北3m、地表下約1.75mの湧水層まで掘削した。

いずれの調査坑においても旧石器は全く確認されなかった。

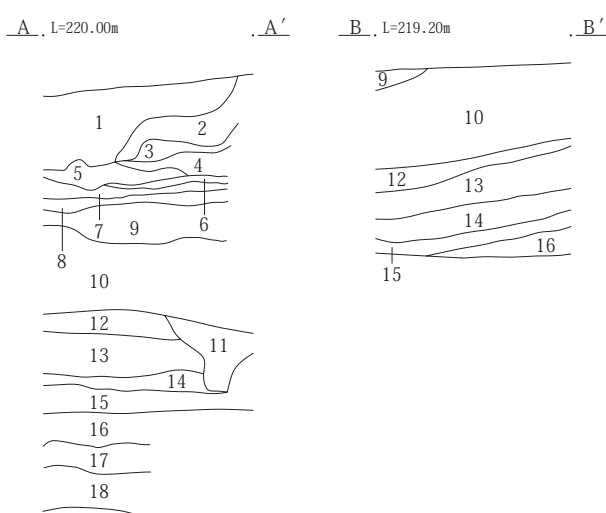
旧石器確認1号トレンチ



旧石器確認1号トレンチ

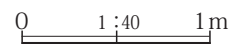
- 1 浅黄色砂質土(2.5Y7/4)
- 2 褐色粘質土(7.5YR4/4)
- 3 にぶい黄褐色土(10YR5/3) 直径1~2mmの淡黄色土粒を多量、直径1~2mmの褐灰色土粒を少量含む。
- 4 直径5~10mmの明黄褐色軽石(10YR6/6)と淡黄色軽石(2.5Y8/4)の混じり。
- 5 直径5~10mmの橙色軽石(7.5YR6/6)・浅黄橙色軽石を少量含む。一部鉄分が沈着して黒色になり、硬化している。
- 6 浅黄色土(2.5Y7/4) 橙色の変色が少々見られる。
- 7 にぶい黄褐色土(10YR6/4) 一部鉄分が沈着して黒色になり、硬化している。橙色の変色が少々見られる。

旧石器確認2号トレンチ



旧石器確認2号トレンチ

- 1 暗褐色土(10YR3/3) 明黄褐色土を微量含む。崩落土。
- 2 明黄褐色土(2.5Y6/6) 直径2~5mmの淡黄色軽石を少量含む。崩落土。
- 3 黒褐色土(10YR3/2)と黄褐色土(10YR5/6)の混じり。崩落土。
- 4 黄褐色土(10YR7/8)と明黄褐色土(2.5Y7/6)の混じり。黒褐色土を少量含む。崩落土。
- 5 明黄褐色土(10YR7/6) 黒褐色土を多量に含む。崩落土。
- 6 明黄褐色土(10YR6/6) 黒褐色土を少量含む。鉄分の酸化による明赤褐色の変色が一部に見られる。
- 7 褐灰色土(7.5YR4/1) 明黄褐色土粒を少量含む。鉄分の酸化による明赤褐色の変色が一部に見られる。
- 8 灰黄褐色土(10YR4/2) 浅黄色土・明黄褐色土・褐灰色土を少量含む。
- 9 明黄褐色土(10YR6/6) 浅黄色軽石を少量含む。
- 10 明黄褐色土(10YR6/8) 黒褐色土を少量含む。
- 11 明黄褐色土(10YR6/8) 浅黄色砂質土(2.5Y7/4)と褐色粘質土(7.5YR4/4)の混じり。根の攪乱。
- 12 浅黄色砂質土(2.5Y7/4)
- 13 褐色粘質土(7.5YR4/4)
- 14 にぶい黄褐色土(10YR5/3)直径1~2mmの淡黄色土粒を多量、直径1~2mmの褐灰色土粒を少量含む。
- 15 直径5~10mmの明黄褐色軽石(10YR6/6)と淡黄色軽石(2.5Y8/4)の混じり。
- 16 直径5~10mmの橙色軽石(7.5YR6/6)・浅黄橙色軽石を少量含む。一部鉄分が沈殿して黒色になり、硬化している。
- 17 浅黄色土(2.5Y7/4) 橙色の変色が少々見られる。
- 18 にぶい黄褐色土(10YR6/4) 一部鉄分が沈殿して黒色になり、硬化している。橙色の変色が少々見られる。



第14図 旧石器確認1・2号トレンチ土層断面図(2号トレンチA-A'は基本土層を兼ねる)

第4章 調査成果のまとめ

群馬県安中市鷺宮新地字城山に所在する磯部城は、J R 信越本線磯部駅から東へ約700m、東西に長い丘陵の西端に位置する標高253mの小山にあり、最高地点である主郭までの間には多くの曲輪や堀・土塁が築かれている。他方、北側は自然地形をそのまま利用しており、城の北側を西から東へ流れる碓氷川が外縁部の濠をなしていたと考えられている。

城内は北西の最高所を本郭とし、そこから標高が下がる順に東の二郭・南の三郭が連結する縄張で、二郭と三郭の間には馬出が繋がって要所を固め、各曲輪間は切り立った空堀で隔てられており、小規模な城ながら極めて堅固な造りである。

東の二郭も北側に土塁があり、東側は「物見平」と記された大土塁で南東隅の虎口に横矢が掛かる。

三郭は二郭南東下にあり、この曲輪も北から東に土塁が付く。三郭は北から東そして南側の山腹に横堀が巡らされており、二郭の大土塁の外側の堀切と交わっている。南からの大手道はこの三郭入口を経て二郭の南東隅の虎口に通じている。これらの遺構は完全に遺されているのである。

内部には至る所に土塁が築かれ、また、櫓台も散見でき、城への侵入者を効果的に阻む仕掛けが備えられていたようである。しかし規模が小さいため、大軍勢の駐屯地や兵站拠点として適しているとは言い難く、あくまでも戦闘機能に特化した一時的な攻撃拠点と見るべきであると言われている。

昭和61(1981)年に城跡のごく一部が安中市教育委員会によって発掘調査されたが、本格的な調査はまだなされていない。現在の城跡は磯部城址公園として一般開放されているが、廃城以来、畑作地や宅地に転用された様子がないので、土塁や空堀の遺構は見事に完存している。城郭内の遺構の残存状況が極めて良好である故にこそ、その解明のためにも、また必要な保存措置を講ずる上でも、本格的な調査と保存・活用のための措置が早急にためられるべきであろう。

また、約600m東の連接する丘陵上に所在する通称「文

殊寺の砦(石尊山砦)」は、本城の烽火台であり、別城一郭であると考えられている。

調査対象地は、この磯部城が所在する小山の南麓であり、J R 信越本線磯部駅の西南西約500mの地点である。安中市鷺宮1946-1、1947番地に当たる。

柳瀬川が城跡の北側を西から東に流れ、調査対象地の東側には磯部城から所謂「文殊寺の砦」が載る丘陵が続いている。調査対象地の北側は断崖状で、所々岩盤が剥き出しになっており、調査区自体も北から南に向けて急傾斜している。

磯部城は、伝承では、鎌倉時代初めの建仁元(1201)年に御家人である佐々木盛綱が築いたといわれている。佐々木右兵衛少尉盛綱は、平安時代末期から鎌倉時代初期の武将で、近江国佐々木荘を地盤とした宇多源氏の流れを汲む名門佐々木氏の棟梁、近江権守佐々木秀義の3男として生まれた。佐々木氏は、八幡太郎義家の嫡系である武家の棟梁河内源氏嫡流家累代の家人であり、盛綱も、伊豆配流時代から源頼朝の近習として仕え、後にその挙兵に従って武功を重ね、鎌倉幕府の創業に関わるとともに、有力御家人として幕府の中樞に在り、建久6(1195)年には東大寺大仏落慶供養のために頼朝に従って上洛し、頼朝の推挙を得て朝廷から叙位任官され、伊予・越後守護に補された。晩年、主君頼朝の死を契機に出家落飾し、上野国碓氷郡磯部郷の所領に在ったが、建仁元(1201)年、建仁の乱が越後で勃発すると幕命を承けてこれを鎮圧平定した。佐々木盛綱が磯部城を築城したのは、この晩年の時期と言われているのだが、城の構造上の特徴から年代的に無理があるとするのが大方の考えで、鎌倉時代築城の可能性はほとんど無いと言われている。現存する城の構造は戦国期のものであり、鎌倉時代の遺構とは認め難い。

実際には、武田晴信が西上野へ侵攻した際の、永禄5(1562)年頃に武田方によって築城されたと推定されている。城山下に横堀を幾重にも巡らせてあるのが武田流の築城術である。城山の東500m地点にある通称「文殊寺の砦」は付随して構えられた狼煙台と考えられている。



第15図 磯部城文殊寺の砦全体図
 (『安中市史』第四巻 原始・古代・中世 2001より)

この頃、甲斐武田氏は西上州の安中氏や長野氏への攻勢を強めており、磯部城は位置的に見て安中氏の拠点である安中城を窺う格好の前線基地であった。武田方は上州に徐々に侵攻し、永禄4(1561)年には安中・松井田両城を分断する位置に八幡平城を築いて、永禄7(1564)年に総攻撃を行い、松井田城を陥落させている。

その後、越後の上杉氏と小田原の北条氏との緊張関係が高まる中、小田原北条氏方が磯部城を改修し、利用したとみる説もあるが、そのような北条方の利用の痕跡は現状からは見受けられないようである。また、その後の磯部城の歴史的な経過については全く不明である。

今回の発掘調査は、調査範囲も狭く、また後世に大きく地形が改変されていたこともあってか、磯部城に関わるような遺構・遺物は全く検出されず、検出された遺構・遺物はいずれも近世～近代初頭のものに限られた。しかしながら、小規模な調査であった割に、出土した近世～近代の陶磁器類は質・両共に豊富であることは特筆に値しよう。それらの購買・流通を促した当該期における上野国の地方農村社会の豊かさを示しているように思われ、古文書、地方誌などからの研究と相俟って、地域における歴史の実像を解明していく上での材料として活用されることを期待するところである。

また、これほどまとめて出土した近世陶磁器類の資料群は、群馬県内における近世陶磁器の一つの指標となるべき資料と位置づけられるものと考えられる。資料として活用されることを期待したい。

第2表 出土遺物観察表

1面崩落土出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				色調	成形・整形の特徴	備考
				口底	9.5 3.4	高	4.5			
第16図	1	瀬戸・美濃 磁器 碗	埋没土 1/2	口底	9.5 3.4	高	4.5	白	内外面型紙摺。	近代

2面整地面出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				色調	成形・整形の特徴	備考
				口底	10.0 3.7	高	5.5			
第16図	1	肥前磁器 染付丸碗	埋没土 2/3	口底	10.0 3.7	高	5.5	白	外面に中華祭り風景染付。口縁部内面に方形区画文帯、見込み装飾帯内に笹文か。	近代

3面整地面下出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				色調	成形・整形の特徴	備考
				口底	6.8 3.6	高	4.1			
第16図	1	瀬戸・美濃 磁器 端反小杯	トレンチ内 完形	口底	6.8 3.6	高	4.1	白	外面に銅板転写による吉祥文。内面無文。高台内に「貫山精製」銘。	近代
第16図	2	瀬戸・美濃 磁器 端反小杯	トレンチ内 1/2	口底	(7.5) 4.0	高	3.7	白	外面に銅板転写による唐草文地に五三の桐紋。内面無文。	近代
第16図	3	瀬戸・美濃 磁器 端反小杯	埋没土 3/4	口底	7.7 4.0	高	4.1	白	外面に銅板転写による唐草文地に菊花紋。内面無文。底部蛇の目凹高台、無釉。	近代
第16図	4	瀬戸・美濃 磁器 小杯	埋没土 2/3	口底	7.2 3.0	高	2.9	白	内面に金彩等で施文するが、剥落。	近代
第16図	5	瀬戸・美濃 磁器 小杯	埋没土 1/3	口底	(8.2) 3.2	高	3.3	白	口唇部と内面に金彩・上絵の痕跡あり。高台内隅に「丸に十」の印刻。	近代
第16図	6	瀬戸・美濃 磁器 平碗	埋没土 1/2	口底	9.0 2.6	高	3.7	白	外面に朱色で紅葉を絵付け。内面無文。	近代
第16図	7	瀬戸・美濃 磁器 染付端反碗	埋没土 1/2	口底	10.5 4.4	高	5.9	白	外面に二重線の斜格子文内に草花染付。口縁部内面に装飾帯、見込み不明文様。	近世末か
第16図	8	瀬戸・美濃 磁器 碗	埋没土 1/2	口底	10.7 3.5	高	5.5	灰白	内外面型紙摺。	近代
第16図	9	瀬戸・美濃 磁器 合子?	埋没土 蓋部1/4	口	(9.0)			白	外面に銅板転写の唐草文様。内面無文。	近代
第16図	10	瀬戸・美濃 陶器 灰釉灯明油皿	1号トレンチ脇 床面直上 完形	口底	7.8 3.2	高	1.7	浅黄	内面に灰釉、貫入入る。底部回転篋削り。見込みにトチン痕3個。	近代
第16図	11	瀬戸・美濃 陶器 灰釉灯明油皿	埋没土 口縁部片	口	(11.2)			灰白	内面に灰釉、貫入入る。口縁部内面に直径1cmほどの円盤形の貼付あり。口縁部外面に煤油付着。	近代
第16図	12	瀬戸・美濃 陶器 練鉢	埋没土 1/4	口底	(16.0) (10.0)	高	(7.9)	灰黄	内外面に灰釉、貫入入る。底部蛇の目高台。	近代か
第17図	13	在地系土器 焜炉風口	埋没土 2/3	長幅	22.6 11.7	高	6.3	橙	幅が広い一方に直径8cm程の円い窓があり、狭い一方は吸気用に側面が抜けている。円窓側の半分は被熱によって明色化しており、特に円窓部とその底面は白色化している。	近世
第17図	14	在地系土器 焜炉風口	埋没土 1/4			高	7.1	橙	側面と底面の一部が残存。側面のナデ調整がよく見える。	近世

3面2号土坑出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				色調	成形・整形の特徴	備考
				口底	(5.3) (2.2)	高	3.1			
第18図	1	瀬戸・美濃 磁器 小杯	埋没土 1/2	口底	(5.3) (2.2)	高	3.1	灰白	外面に銅板転写による吉祥文。内面無文。外面に型作りの痕跡あり。	近代
第18図	2	瀬戸・美濃 陶器 灯明皿受台	埋没土 台部2/3	底	6.6			黄灰白	受部欠損。上面に灰釉。底部蛇の目。	近世、17世紀中葉～18世紀前半

第4章 調査成果のまとめ

3面4号土坑(井戸)出土遺物

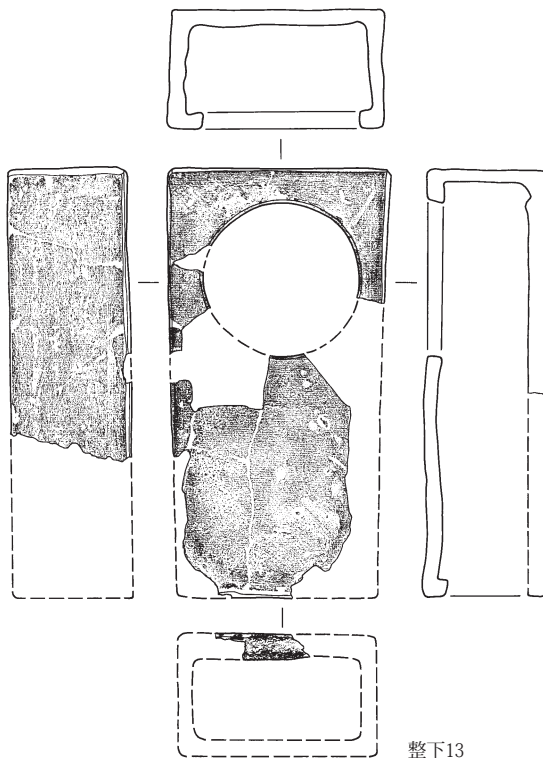
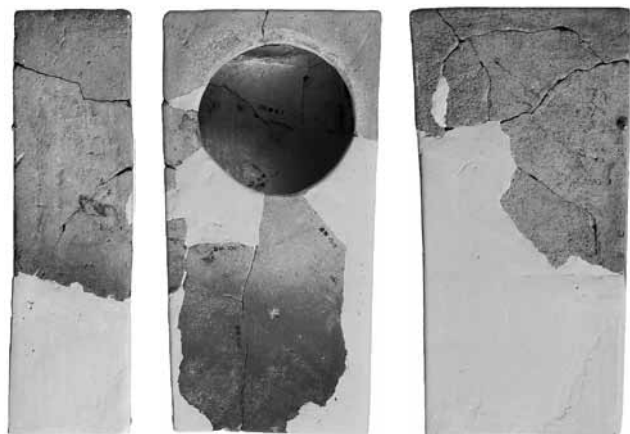
挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			色調	成形・整形の特徴	備考
				底	口	高			
第18図	1	肥前磁器 段重?	埋没土 1/3	底	11.0		白	外面に染付。内面底部に回転刷毛目文様。腰下の重ね段部に漆喰様の粘土を塗布。	近世か
第18図	2	瀬戸・美濃 磁器 小杯	埋没土 3/4	口 底	6.6 1.7	高 3.1	白	内面に青色塗料で海浜風景を描き、一部に金彩を施す。高台外面に雷文、高台内に不明銘。	近代
第18図	3	瀬戸・美濃 磁器 染付皿	埋没土 1/2	口 底	(10.9) 6.0	高 1.7	白	内外面に手描きで蔓花文染付。口唇部に呉須。見込みに渦文。高台内に不明文様。	近代
第18図	4	瀬戸・美濃 磁器 染付端反碗	埋没土 3/4	口 底	10.5 3.8	高 5.5	灰白	外面に手描きで菖蒲図染付。口縁部内面に弧文帯、見込み一重圏線内に不明文様。	近代
第18図	5	瀬戸・美濃 磁器 染付丸碗	埋没土 2/3	口 底	11.1 3.9	高 5.5	白	外面に手描きで草花文染付。口縁部内面に鋸歯文帯、見込み一重圏線内に「大化年制」銘。	近代
第19図	6	瀬戸・美濃 磁器 染付丸碗	埋没土 1/2	口 底	10.0 3.4	高 5.0	灰白	外面に手描きで花文染付。口縁部内面に二重圏線、見込み一重圏線内に「福」。	近代
第19図	7	瀬戸・美濃 陶器 灰釉灯明受皿	埋没土 1/3	口 底	(10.9) 3.8	高 1.5	にぶい黄橙	内面に灰釉。底部回転篋削り。	近世か
第19図	8	瀬戸・美濃 陶器 黄釉小碗	埋没土 1/2	口 底	8.8 4.1	高 3.3	浅黄	外面腰上から内面に黄釉。外面に重焼痕。	近代
第19図	9	陶器 蓋	底面上20cm 一部欠	口	18.8	高 4.2	浅黄橙	上面外周に飛び鉋を施し、蛇の目に錆釉。内面全体に錆釉。	近代
第19図	10	瀬戸・美濃 陶器 錆釉徳利	底面上14cm 口縁部欠	底	11.8		黄灰白	口縁部欠損。外面にたつぷりの錆釉。高台内外の釉を掻き取る。肩部に櫛歯の刷毛目が一条。	近世
第19図	11	土器 土人形	埋没土 破片				明橙	人物をモチーフとした座像の中空品で、右手前部分にあたる。	近世

第3表 非掲載遺物集計表

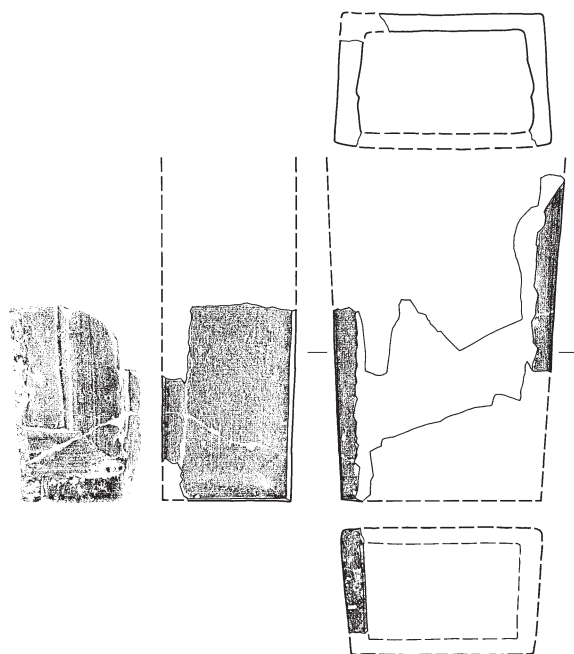
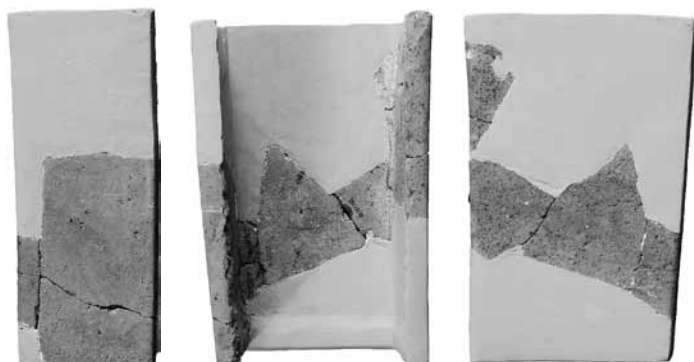
遺構 番号	遺構種	近 世									近 現 代					時 期 不 詳			
		中国 磁器	中国 陶器	国産 磁器	国産施 釉陶器	国産焼 締陶器	在地系 焙烙・鍋	在地系 皿	在地系 その他	瓦	陶磁器	土器類	瓦	十能瓦	ガラス	その他	土器類	瓦	その他
1	土坑										2								
2	土坑									8	2								
4	土坑			2						23	18			4	1				
5	土坑									4	1	1		4					
1	炉									1					1				
2	ピット									1	1				1				
3	ピット											1							
4	ピット											1							
	崩落土中									10		3		6	2				
	整地面									17	6	11		19	2				
	整地面下			7	2		1		6	149	45	15		56	18	3			
	計	0	0	9	2	0	1	0	6	0	213	75	32	0	89	25	3	0	0
	合計									18					434				3



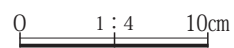
第16図 1面崩落土・2面整地面出土遺物、3面整地面下出土遺物(1)



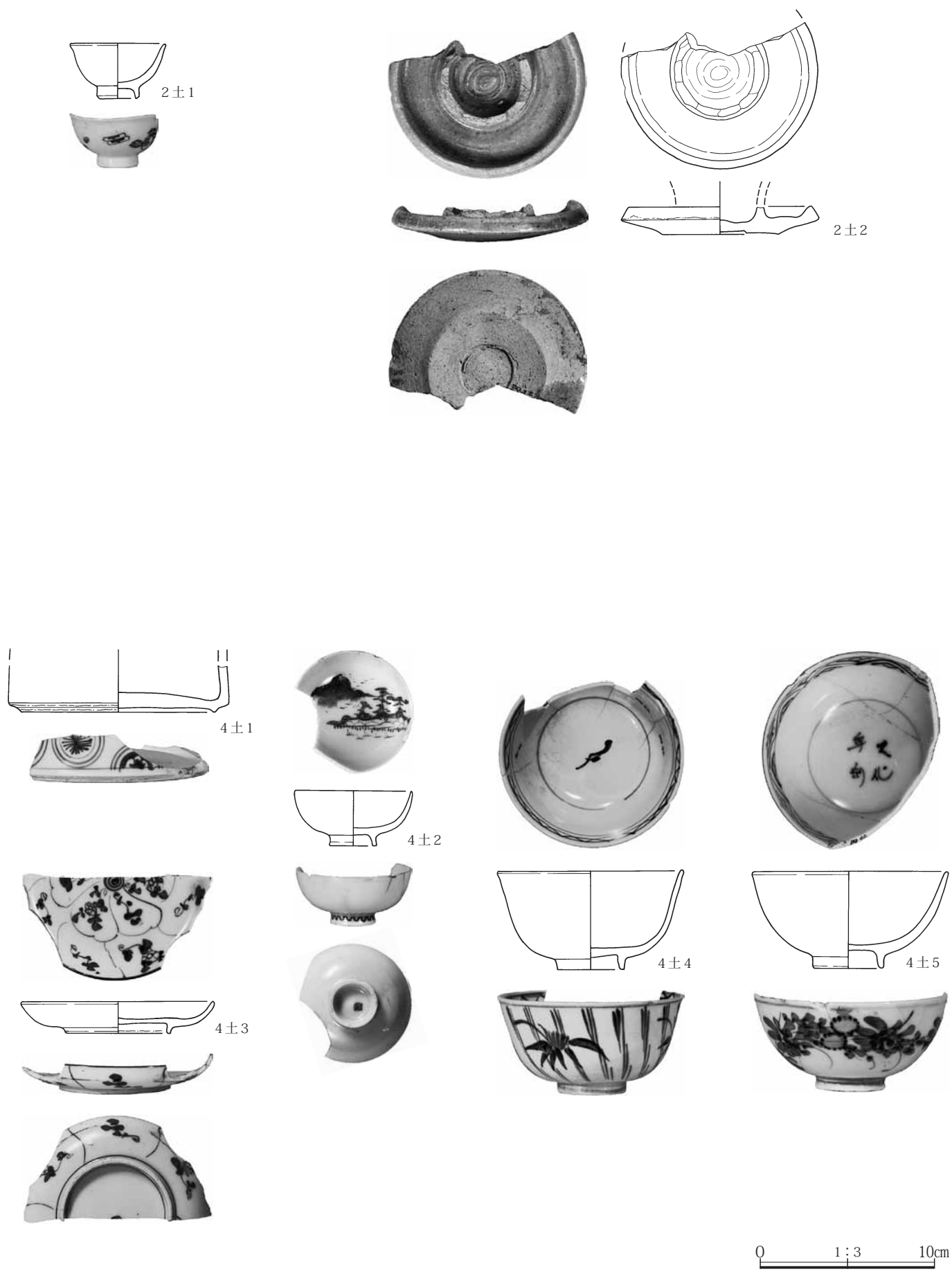
整下13



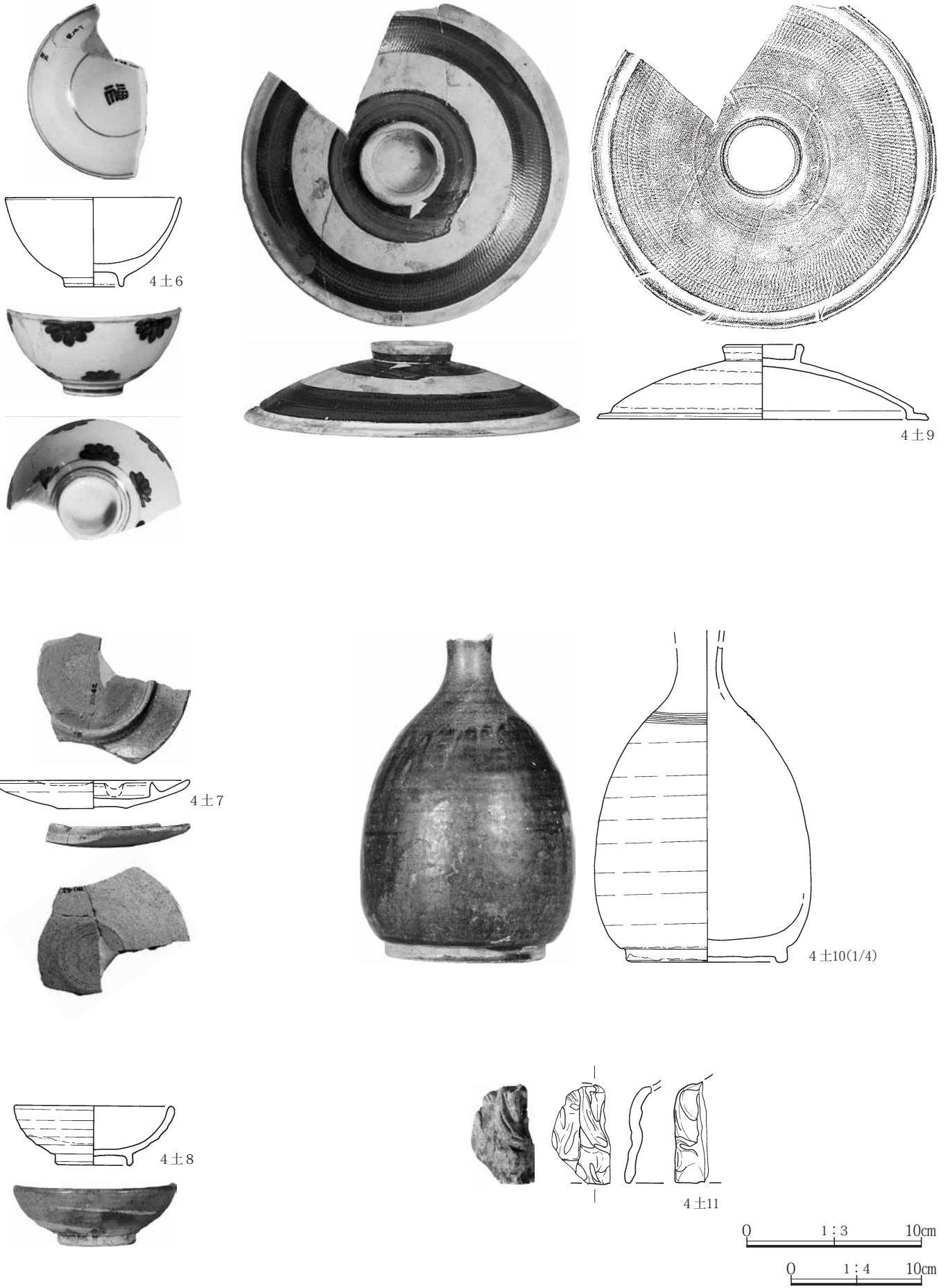
整下14



第17图 3面整地面下出土遺物(2)



第18図 3面2号土坑出土遺物、3面4号土坑(井戸)出土遺物(1)



第19图 3面4号土坑(井戸)出土遺物(2)

写真図版



1. 北壁土層断面(南)



2. 1面西側全景(東)



3. 2面西側全景(東)



4. 2面1号炉土層断面(東)



5. 2面1号炉上面全景(東)



6. 2面1号炉上面全景(北)



7. 2面1号炉中面全景(北)



8. 2面1号炉全景(南)



1. 2面1号炉全景(東)



2. 2面1号炉掘方全景(東)



3. 2面3号土坑土層断面(東)



4. 2面3号土坑全景(東)



5. 2面1号トレンチ全景(南東)



6. 2面1号トレンチ土層断面1(東)



7. 2面1号トレンチ土層断面2(東)



1. 2面1号トレンチ土層断面3(東)



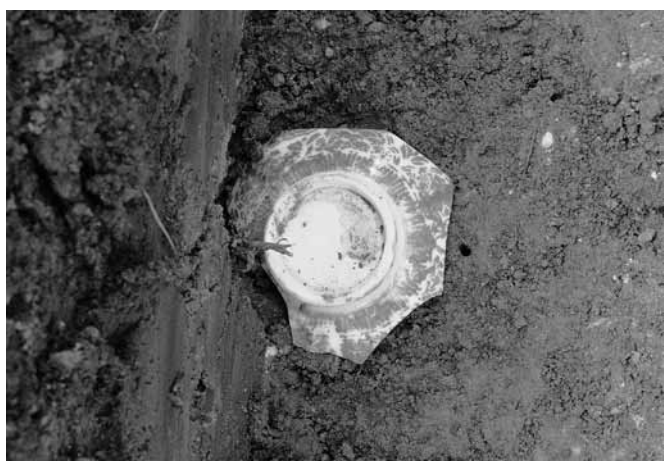
2. 2面1号トレンチ土層断面4(東)



3. 2面1号トレンチ土層断面5(東)



4. 2面遺物出土状況1(東)



5. 2面遺物出土状況2(東)



6. 2面遺物出土状況3(東)



7. 2面遺物出土状況4(西)



8. 2面整地面肥前磁器染付丸碗(1)出土状況(東)

PL.4



1. 3面整地面下遺物出土狀況 1 (東)



2. 3面整地面下遺物出土狀況 2 (東)



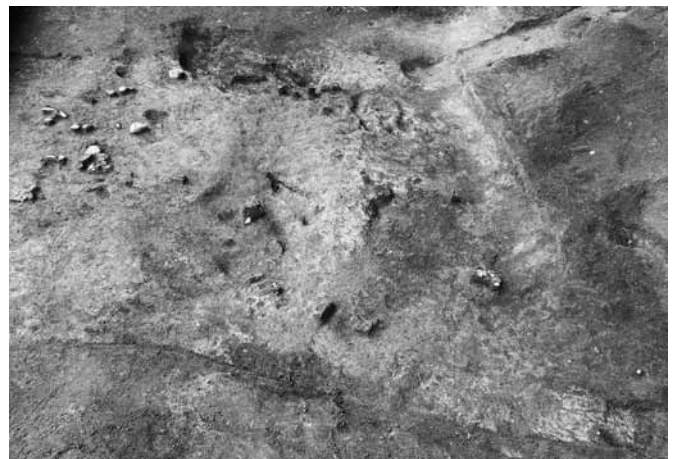
3. 3面整地面下遺物出土狀況 3 (東)



4. 3面整地面下遺物出土狀況 4 (東)



5. 3面整地面下遺物出土狀況 5 (東)



6. 3面整地面下遺物出土狀況 6 (東)



7. 3面整地面下遺物出土狀況 7 (東)



8. 3面整地面下遺物出土狀況 8 (東)



1. 3面整地面下遺物出土狀況9(東)



2. 3面西側全景(東)



3. 3面1号土坑土層断面(東)



4. 3面1号土坑全景(東)



5. 3面2号土坑全景・土層断面(北)



6. 3面4号土坑(井戸)土層断面1(南)



7. 3面4号土坑(井戸)土層断面2(南)

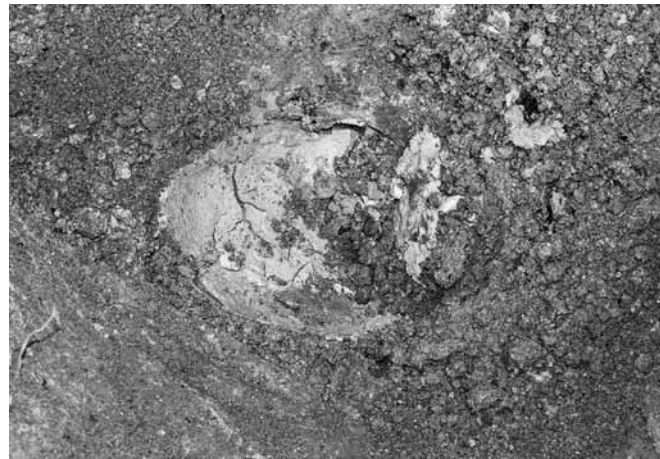


8. 3面4号土坑(井戸)鍔軸德利(10)出土狀況1(南)

PL.6



1. 3面4号土坑(井戸)錆釉徳利(10)出土状況2(南)



2. 3面4号土坑(井戸)遺物取り上げ後(南)



3. 3面4号土坑(井戸)底部遺物出土状況(北)



4. 3面4号土坑(井戸)全景(南)



5. 3面5号土坑土層断面(東)



6. 3面5号土坑全景(北東)



7. 3面1号ピット土層断面(南)



8. 3面1号ピット全景(南)



1. 3面2号ピット土層断面(南)



2. 3面2号ピット全景(南)



3. 3面3号ピット土層断面(南)



4. 3面3号ピット全景(南)



5. 3面4号ピット土層断面(南)



6. 3面4号ピット全景(東)



7. 西壁土層断面A-A'(東)



8. 北壁土層断面1(南)



1. 北壁土層断面 2 (南)



2. 北壁土層断面 3 (南)



3. 北壁土層断面 4 (南)



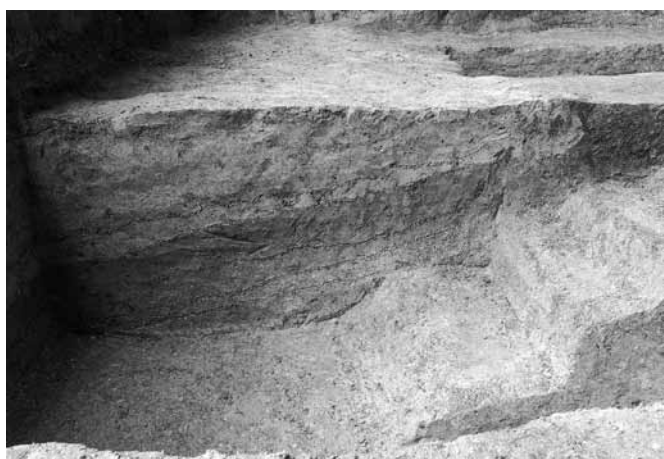
4. 旧石器確認 1 号トレンチ土層断面 A-A' (北)



5. 旧石器確認 1 号トレンチ土層断面 B-B' (東)



6. 旧石器確認 2 号トレンチ土層断面 A-A' (北)



7. 旧石器確認 2 号トレンチ土層断面 B-B' 1 (東)



8. 旧石器確認 2 号トレンチ土層断面 B-B' 2 (東)

報 告 書 抄 録

書名ふりがな	いそべじょう
書 名	磯部城
副書名	砂防施設(急傾)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻 次	
シリーズ名	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	611
編著者名	高島英之
編集機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20160131
作成法人 I D	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住 所	群馬県渋川市北橘町下箱田784-2
遺跡名ふりがな	いそべじょう
遺 跡 名	磯部城
所在地ふりがな	ぐんまけんあんなかしさぎのみや
遺跡所在地	群馬県安中市鷲宮1946-1、1947
市町村コード	10211
遺跡番号	1524
北緯(世界測地系)	362969
東経(世界測地系)	1388617
調査期間	20140601-20140631
調査面積	129.4
調査原因	砂防工事
種 別	城郭
主な時代	近世/近代
遺跡概要	近世・近代－土坑4＋井戸1＋屋外炉1＋陶磁器
特記事項	近世末期～近代初頭の陶磁器が出土し、当該期の当該地域における食器流通の一端を知ることが出来る。
要 約	磯部城が所在する丘陵の南麓直下に当たる位置にかかる発掘調査で、磯部城の城構の一部と考えられる部分が調査され、近世末期から近代初頭にかけての土坑、井戸、柵列、屋外炉などの遺構と陶磁器が出土した。

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第611集

磯部城

砂防施設(急傾)事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査

平成28(2016)年2月22日 印刷

平成28(2016)年2月22日 発行

編集・発行／公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2

電話(0279)52-2511(代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷／ジャーナル印刷株式会社

